月刊FALCOM MAGAZINE

Vol.18



蠢きだした
≪身喰らう蛇≫の目的とは……
空の軌跡外伝 レーヴェ物語

ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばります の舞台裏

ルーアンを舞台とした
恋模様の行方は?
英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット

キーアの何もない平和な一日?
英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～

ファルコムjdkバンドドラマー・オカジの
人生半キャラずらし

Falcom FanArt Collection

あの家族がザナドゥにやってきた!

コミックス第1巻も好評発売中!!

みんな集まれ! ファルコム学園



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～



著：むらさきゆきや
イラスト：窪茶

第6話 『キーアのいちにち』

チチチ……と小鳥の鳴き声がする。

窓からはもう朝の陽光が差しこんでいる。

静かな寝息が、やむ。

「んにゅ」

ライムグリーンの髪の幼い女の子が、ベッドのなかで身じろぎをひとつ。

もう一度、チチチ……と、さえずりが聞こえる。

「ん？　あ……もう、あさ？」

幼い女の子がまどろみから浮かびあがる。つぶやきに答えるかのように小鳥が再三の声をあげる。

チチチ……

「え？　そんな時間!?」

勢いよく起きる。

ぱちっと目を開いた彼女の瞳は、きれいな金色をしている。

意志の光が宿り、その想いを伝える手が、ふわりと持ち上がると、まだ隣で眠っている青年の顔へと舞い降りる。

ぺちぺちと頬を叩く。

「たいへん、たいへん！　ロイド、朝、朝！」

「うっ、わっ……なんだ!?」

ロイドと呼ばれたブラウンの髪の青年は、不作法な頬への来襲者から逃れるように顔をそむけつつ、体を起こす。

「や、やあ、おはよう……キーア」

「おはよ、ロイド！　もう朝だよ！」

「ん？」

青年はベッドの脇に置いてある《ENIGMA》——戦術オーブメントのうち第5世代のものを指す——を手に取る。

無機質な導力器が告げるのは、とうに起床時刻が過ぎてい



るという無慈悲な事実。

ロイドは魔獣から攻撃をされたような悲鳴をあげる。

「うわっ!?」

「ちこくしちゃう！」

「キ、キーア、急ごう!!」

「うん！」

言いながらふたりはベッドから飛び出す。

ロイドはクローゼットからシャツやズボンを取り出し、寝間着を脱ぎ捨て、着替えはじめる。

キーアのほうは服を置いてあるのが自分の部屋なのでドアへと足を向け……

あ、と窓へと振り返る。

外に向けて。

「鳥さん、起こしてくれてありがと～!!」

満面の笑みを浮かべ、小さな手を大きく振ると、今朝は玄関の前にパンをちぎって置いておこうと決め、それから部屋の外へ出る。

今日もいい天気になりそうだ。

紫色のシャツに白色のパーカーを羽織り、オレンジ色のスカートをはく。

着替えを済ませたキーアは三階にある自分の部屋から一階まで階段を駆け下りる。

トントントトンと後を追いかけてくるのは、お尻まである長い髪。

キーアの住んでいるのは特務支援課ビルという。特務支援課は、この街──クロスベルを守る警察のいち部署であり、すこし風変わりではあるが、ロイド・バニングスは捜査官で、キーアは養われの身だ。

そして、支援課ビルにはロイドとキーアの他に四人と二匹の仲間がいるのだが、それは追々……

先に着替えを済ませていたロイドが、もう台所に立っている。

「やあ、おはよう、キーア」

「おはよっ、ロイド！」

起き抜けのときは、お互いに大慌てだったので、改めて挨拶を交わす。

ロイドが苦笑いを浮かべる。

「あやうく、みんなの朝食が遅くなるところだったよ。起こしてくれてありがとうな、キーア」

「えへへ、今日はロイドが朝ごはんの当番だったもんね。あ、《モルジュ》には行かないの？」

西通りにあるベーカリーカフェ《モルジュ》の焼きたてパンときたら、外はサクッとして香ばしく、中はやわらかくてふわふわしていて、頬が緩む美味しさなのだ。

「うーん……買い物してる時間はなさそうだな。堅焼きパンがあるから、こちらにしておこう」

「うん、そうだね」

「あとは、スクランブルエッグを作るとして……ハムを焼こうかな？」

「じゃあね、キーアはスープを作る！」

「大丈夫か？　たいした材料は残ってないけど……」

「少しお野菜があれば、だいじょうぶだと思う」

「そうか。頼もしいな」

「えへへっ」

料理をしているうちに、とんとん、と上品な足音が降りてくる。

パールグレイの髪を腰まで伸ばした美しい少女が、キッチンに顔を出す。支援課の仲間であるエリィ・マクダエルだ。

キーアは元気いっぱいに挨拶する。

「エリィ、おはよ！」

「おはよう、キーアちゃん、ロイド」

「やあ、おはよう、エリィ。すまないが、もうすこし待ってくれ」

「なにか手伝いましょうか？」

「ありがとう。皿を出してくれるかな？」

「ええ、わかったわ」

ことり、ことり、と静かな音をたてて皿がならべられていく。エリィが扱うと、いつも使っている器なのに、ちょっと高級品になったように感じられるから不思議だ。

朝食の用意ができた頃、ライトブルーの髪に白い肌の少女が姿を見せる。

ティオ・プラトーだ。

なぜか、ぬいぐるみを引きずって。

みっしぃというクロスベルで大人気のマスコットキャラクターで、ＭＷＬ（ミシュラムワンダーランド）なんていう遊園地まである。

「やあ、ティオ、おはよう」

ロイドが挨拶すると、ぼんやりした表情だった少女の頬に、朱が差しこむ。

「うっ、あ……これは……」

「ティオちゃん、顔、洗ってきたら？」

「そ、そうします」

エリィに言われ、ティオがそそくさと洗面所へ消える。

どうやら、すこし寝ぼけていたらしい。

しばらくして再び現れたティオは、どこへしまったのか、ぬいぐるみを手にしておらず、胸甲をつけ、いつものクール

な表情を見せる。まるで先ほどの寝ぼけた姿などなかったかのように。

「おはようございます、ロイドさん、エリィさん、キーア」

「ああ」

「おはよう、ティオちゃん」

「おはよ、ティオ！」

特務支援課の課長は、いつも朝食には姿を見せないので残るはひとりだけ。

エリィが首をかしげる。

「ランディはどうしたのかしら？」

「……まだ眠ているようですね」

「昨夜は遅かったみたいだからな。今日は非番だし、ゆっくり寝かせておいてやろう」

ロイドの言葉に、みんながうなずく。

「じゃあ、いただきまーす！」

キーアが手を合わせ、すこし賑やかな朝食の時間となる。

そうそう、とキーアはパンをすこしちぎって、ポケットにしまう。

あとで、玄関の前に置いておくのだ。



支援課ビルの玄関を入ってすぐの場所には、ソファーとテーブルがあり、応接スペースとなっているのだが、もっぱら、キーアはリビングとして使っている。

ここで、本を読んだり、歌を歌ったり、ツァイトとおしゃべりして過ごす。

ツァイトは警察犬として支援課ビルにいるが、本当は伝説の白狼らしい。

応接スペースは、居心地がいい。なにより、ロイドたちが仕事から帰ってきたとき、一番に出迎えることができるから。

キーアは図書館で借りてきた本を広げる。

そこへエリィがやってきて。

「あら、キーアちゃん、絵本を読んでるの？」

「うん！　エリィも見る？」

「ふふ……じゃあ、いっしょに見ましょうか」

「えへへっ、やった！」

ソファーにならんで座り、絵本を開く。

こうしていると、まるで母娘のようにも見えそうだが、そういうことを言うとエリィが「まだ18だから……」と真剣な顔をするので控えておく。

絵本をエリィが美しい声で読み上げる。

「――お礼に、トマトをたくさんもらいました。ミネストローネをつくりましょう、と姉のジーナがいいました。あたたかい、ミネストローネをいっぱい……」

「ねえねえ、エリィ、ミネストローネってなに？」

「トマトを使ったスープかしら？　私も食べたことはないけど……この絵本の書かれた国の鍋料理みたいね」

本には、大きな鍋で赤いスープを作る姉弟（きょうだい）の絵が描かれている。

冬は雪に閉ざされて、買い物に出かけるだけでも大変な国であるらしい。

「トマトのスープってどんな味なのかしら？　なんにしても、きっと体の温まる料理なのでしょうね」

「きっとそうだね！　面白いよね、エリィ。絵本には、寒い国がすごく大変って書いてあるけど、書いたひとは、この国のことが大好きなんじゃないかな？」

「私もそう思うわ」

「でも、この国のことが好きなんて書いてないのに、不思議だね」

「そうね……直接的に書いてある下りはないわ。これは間接的表現というものだけど……」

「んと、エリィは、どのへんから読み取ったの？」

「んー……この下りは象徴的よね。姉弟が母親のために暖かい料理を作るところ。寒くて大変な国だからこそ、家族が互いのことを大切に想っているのが伝わってくるわ」

「お母さんのためって書いてないのにね」

「そうね。だとすると、作者が一番表現したかったのは……あっ」

「なに？」

「楽しく絵本を読んでるのに、考察とか興醒めよね。まるで留学先の学生たちと話してるみたいな気分になっちゃって……キーアちゃん、ときどき鋭いことを言うから、びっくりしちゃうわ」

「えへへっ、そうかな？」

「そうよ。さっきの洗濯の下りでも……あ、そういえば、私、洗濯物を干さないと」

エリィが腰を浮かせる。

「ごめんなさい、キーアちゃん。また後でね」

「お洗濯？　キーアも手伝う！」

「まあ、ありがとう」

カゴに洗濯物を入れて、屋上へと階段をのぼっていく。

途中でロイドと会う。

「お、今から干すのか……手伝うよ、エリィ」

「そんな、悪いわ」

「朝食の準備を手伝ってもらったから、お互い様さ」
「そう？　じゃあ、お願いするわね」
「キーアも手伝うよ！」
「おっ、えらいぞ、キーア」
　三人で屋上に出る。

　導力を利用した洗濯機が開発されたのは、それほど昔のことではない。
　まだ手洗いで済ませる家庭もあるが、政府や警察には企業が試験運用を兼ねて目新しい製品を提供してくれている。
　例えば、この支援課と警察本部をつなぐ導力ネットワークも、魔法（アーツ）を使うために必要な戦術オーブメントも、エプスタイン財団から提供されたものだ。
　最新装備のおかげで捜査が効率的になる反面、急な仕様変更で面倒が増えることもあるのだが。
　いずれにしても、洗濯物をお日様に当てるのは、鉄の塊が空を飛ぶほど導力技術が進歩している今日（こんにち）でも、人の手によって行われるしかない。
「キーアちゃん、そっち持った？」
「うん！」
「じゃあ、広げるわね」
　シーツの端と端を持って、キーアはエリィといっしょに大きな白布を物干し竿へとかける。
　ぴんと引っ張ると、シワが消えて寝心地がよくなるのだ。
　ほどよい風が、支援課ビルの屋上を撫でていく。
「あ……みなさん……」
　屋上の入り口を見ると、ティオが手に黒色の物を持って立っている。
　はて？　とキーアは思う。
　ロイドとエリィも首をかしげる。
　どこか、いつもとティオの雰囲気が違う。
　なにかが足りないような。
「あの……これも干したいのですが……場所はありますか？」
　ティオが手に持った黒色で三角形の機械を差し出す。
　まるで猫の耳のような。
「あ！　いつも頭につけてるやつか！」
　ロイドが言って、キーアもエリィも、それだ！　と気づく。
　ティオが手にしていたのは、頭につけている猫の耳のような三角形の髪飾りだ。
「それ、取れたんだね」
「……キーア、おかしな誤解をしないでください。これは、センサーですから。いつもは頭に載せているだけですし、完全防水なので水洗い可能です」
「なんか、すごいね」

　キーアは妙に感心してしまう。
　エリィが不安そうに尋ねる。
「ティオちゃん、それ洗濯バサミで挟んじゃっていいのかしら？」
「……できれば陰干しのほうがいいかと」
「それなら、階段室の陰がいいわね」
「はい」
　ロイドが肩をそびやかす。
「そのセンサーとか、胸の甲を外してると、ずいぶん印象が変わるもんだな」
「えっ……おかしいですか？」
「まさか。いつもとは違うけど、どちらもかわいいよ」
「あ…………」
　ティオが頬を染める。
　ふぅ、とエリィがため息をつき、
「またそういうこと言って」
　とジト目になる。
　相変わらずロイドはわかっていないようで、「？」と小首をかしげる。
　そんなふうに、おしゃべりしながらも、カゴから洗濯物を取って次々と干していく。
　ハッ！　とティオが顔色を変える。
「な、なにをしているんですか、ロイドさん!?」
「え？　洗濯物を干してるんだけど……？」
「どうしてロイドさんが!?　あ……いや、今日は全員が非番の日……予想しておくべきでした！　わたしとしたことが」
　ティオが顔を赤くして、わなわなと震える。
　理由に気づいたエリィが、申し訳なさそうに言う。
「あの……ロイド、その手にしてるのは……」
「ん？　洗濯物だろ？」
「いえ、だから、それは……女の子のでしょう？」
「そりゃあ、こんな小さな下着、俺やランディが使えるわけが……」
　ぴらっ、とレースのついたショーツを広げ、そのあたりで、ようやく歩く鈍感、天然ジゴロ、超ニブちんさんも事態の重大さに気がついたらしい。
「ご、ごめん！　これ、ティオのだったのか!?」
「誰のでもいいんです！　そういうのは、エリィさんに任せて、見なかったことにしてください！」
　そう叫びながら、ティオがロイドの手から小さな布をひったくる。
「ああ、そうか、なるほど」
「ごめんなさいね、ティオちゃん。私も気が回らなくて」
「いえ……これは本当にわたしのミスですから。エリィさん

が謝るようなことでは……」

　ティオの顔は、反応したセンサーみたいに真っ赤になっている。

　キーアは不思議で仕方ない。

「ロイドがティオのぱんつ干したらダメだったの？」

「ダメということはないですが……できれば、避けたいことなんです」

　ため息まじり。

　そして、キーアも大人になればわかります、とつけ足される。

　ふぇ～と、うなずく。

　大人の世界は複雑怪奇だ。

　どうにも居所のなくなったロイドが引き上げて、結局、洗濯物はエリィとティオとキーアで干すことに。

　お昼ご飯は、ティオの当番だ。

　スパゲッティを茹でて、ミートソースをかける。

　手を抜いているわけではないが、ティオは料理にあまり時間を使わない。

　効率よく手際がいい、という感じだ。

「ランディさんは、まだ起きてこないようですね」

「そうみたいだな」

　ロイドがうなずく。

「キーアが起こしてこようか？」

　尋ねると、エリィが頭を横に振る。

「大丈夫だと思うわ。お腹がすいたら起きてくるでしょう」

「はは……動物みたいだな」

　ロイドが笑うと、応接スペースで寝そべっていたツァイトが、グルルとうめく。

　ティオが肩をすくめる。

「……『動物の生活は、もっと規則正しい』だそうです」

「な、なるほど」

「ツァイトにも、ごはんをあげないとね」

　キーアは皿に牛乳を注ぎ、パンをちぎってひたして白狼の前におく。

「ガウッ」

「えへへ……お肉は、晩ごはんにね」

　ツァイトがお昼を食べはじめるのを横目に、キーアも食事に戻る。

　前々から思っていたのだけれど、とエリィ。

「固いパンをあげるときは、牛乳にひたして出しているわよね。でも、鉄すら噛み砕いてしまうツァイトには、かえって

やわらかくなりすぎないのかしら？」

「あ……」

「どうでしょう？　物足りないですか、ツァイト？」

　ティオが尋ねると、口のまわりを牛乳で白くした白狼が、ガウッと返す。

　キーアとティオはうなずく。

　ふたりは動物の言葉がわかるという、不思議な力があるのだ。

「……『ぱさぱさした味は好みではない』らしいです」

「牛乳にひたしたパンは、おいしいんだって」

「なるほど、グルメ的な意味があったのね」

　エリィが納得する。

　神狼と呼ばれ、超然としているツァイトが、固いパンより牛乳にひたしたパンのほうが美味しいから好きというのが、なんだか微笑ましい。

　おしゃべりしながら、食事は進んでいく。

　ランディは起きてこない。

　昼食が終わって、お片づけを手伝ったあと、キーアはツァイトの毛繕いをする。

　その体毛は、毛玉のひとつもできないほど完璧ではあるけれど、櫛でといであげるともっと綺麗になるのだ。

　ツァイトが目を細める。

「えへへっ、気持ちいい？」

「ガウ……」

「そう？　こっちもね」

　まふまふした尻尾まで櫛をいれる。

　そうやって、なでているうち、キーアのまぶたが落ちてくる。

　お腹はいっぱいだし。

　お日様はぽかぽかだし。

「ん……」

　なでられて、まったりとしているツァイトの背に、ぽさりと頭をあずける。

　すー、とキーアの寝息。

　ツァイトは身じろぎもせず、その幼く小さな身体を受け止めている。

　静かな時間が流れて……

「じゃあ、行ってくる」

　ロイドの声に目を覚ます。

「ん……？」

　顔をあげると、ちょうど玄関にロイドとエリィの姿があって、ふと目が合う。

「あ、起こしちゃったか、キーア」

「ロイド……お出かけするの？　またお仕事？」

「いや、買い物に行くんだ」

「キーアちゃんも、いっしょに行く？」

　エリィが誘ってくれる。

「いいの!?　じゃあ……」

　ふとティオだけは見送る側で、食堂としても使っている会議スペースに残っていることに気づく。

「ティオは行かないの？」

「そうですね。買い物はロイドさんとエリィさんにお任せして、わたしはここの掃除をするつもりです。たまの休みにやっておかないと、どんどん汚れるばかりですから」

「ん……じゃあ、キーアはティオを手伝う！」

「え？」

　ティオが目を丸くする。

「……キーア、ロイドさんたちと一緒に買い物に行くほうが、楽しいのでは？」

「そうかもしれないけど、おそうじ、ティオひとりだと大変でしょ？」

　じ～～～ん、とティオが感動に震える。

　目尻に涙までにじませて。

「キーア……明日、みっしぃクッションを買ってあげます。期間限定で発売されるそうですから」

「えっ、いいの!?　わ～い！」

　ティオはキーアに甘々だ。

　ロイドがエリィと顔を見合わせ、苦笑する。

「はは……ちょっとくらい過保護でも、キーアは大丈夫だと思うけど……」

「むしろ、ティオちゃんの将来が不安ね」

「む……なんですか、ロイドさん、エリィさん？　おかしなことは言っていませんよ。労働に対する正当な報酬というものです」

「かまわないけど、でも俺やランディが手伝ってもなにも買わないだろ？」

「ふーむ……おふたりが、みっしぃクッションを喜んでくれるなら買ってきますが……」

「いや、それは……話が噛み合ってないような……？」

「みっしぃグッズをプレゼントして喜んでもらえるのは、わたしにとっても、ご褒美なのです」

「うーん……ティオがキーアとみっしぃのことを大好きだってことは伝わったよ」

「ふふ……それがわかってもらえれば充分です」

　ティオが満足げにうなずき、やっぱりロイドたちは苦笑するのだ。

　ロイドとエリィは買い物に出かけ、キーアはティオと一緒にまず会議スペースを掃き掃除。

　バケツに水をくんできて、モップがけ。

　最後に細かいところを拭きあげる。

　そろそろ、終わろうか——

　という頃になって、のっしのっしと足音が降りてくる。

「う～……頭、ガンガンする……」

　現れたのは、ランディ・オルランド。

　長身で赤毛の青年だ。すこしふらつき、壁に手をついて体を支える。

　キーアは笑みを浮かべて。

「あっ、ランディ！」

「む……おう、キー坊か。相変わらず、声が甲高いな」

「なにか食べる？」

「そうだな……まず水をくれや。あと……なんか、やわらかいもんがいいな」

　キーアはティオと視線を交わす。

「——やわらかい食べ物!!」

「あれでいいかな？」

「あれがいいでしょう……」

　ランディが食堂のイスに崩れるように腰掛け、うーとか、あーとか、うめいている。そこへ、急いで用意した皿を置く。

「どーぞっ、ランディ！」

「ランディさん、お水です」

「お……すまねえな……ごくっ、ごくっ」

　水で喉をうるおしてから、濁った目つきで皿を覗きこむ。

「ん？　ああ、パンを牛乳にひたしてあるのか」

「えへへっ」

「どうぞ……やわらかくて、ぱさぱさしてなくて美味しいかと」

「ああ、そうだな」

「ちゃんとスプーンを使ってね？」

「あー……ねえぞ？」

「そうでした、スプーンが必要でした。すぐ持ってきます」

「おう……？」

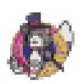
　妙なことを注意されて、ランディが首をひねる。

　持ってこられたスプーンを受け取り、牛乳にひたしたパンをすくう。

　ティオがキーアに耳打ちしてくる。

「……大きくて、毛が長いところが似てます」
「うん。なんか今日のランディは、ゆっくりしてるしね」
　小さなふたりに、まじまじと見つめられ、やや居心地悪そうにしつつ、ランディが皿を空にする。牛乳にひたしたパンは美味しかったらしい。
　応接スペースのほうで、ツァイトがウォン！　と鳴いて、キーアとティオは、くすりと笑う。
　ぐぐ〜っとランディが伸びをする。
「ふぅい〜〜〜、サンキュ……マシになったぜ」
「キーア、お茶にしましょう」
　お掃除もひと段落ということで、ティオが紅茶をいれてくれる。
　香りのいいフレーバー。
「うん！」
　元気よくうなずいて、キーアはイスに腰掛ける。
　ティオとランディと——この三人でティータイムなんて、ちょっと珍しい。
　お砂糖を多めに落とした紅茶が、キーアの前に差し出される。
「はい、どうぞ」
「ありがとう、ティオ！」
「ランディさんも……」
「ブランデーはないのか？」
「ありません。あっても出しません」
「冗談だ」
「昨夜は、ずいぶん遅かったみたいですね？」
　言われて思い出したのか、にやりとランディが笑う。
「ふっふっふっ、休みの前なんで久々にカジノに行ったら、ポーカーで大勝ちしてよ。明るくなるまでバーで大騒ぎしちまったぜ。いや〜、とうとう俺のギャンブラーとしての才能が開花したようだな」
「はぁ……カジノのうえに、朝までバーですか……ランディさん、最低です」
　ティオのジト目もなんのその、ランディは鼻歌まじりで得意気だ。
　キーアが身を乗り出す。
「ランディ、ポーカーってなに？」
「知らないのか？　よし、教えてやるよ」
「やったー!!」
「ちょっ……ランディさん!?」
　険しい表情になったティオに、ランディが片手をあげる。
「わかってるって。ミラなんか賭けねえし、どうせカジノには入れねえ。ババ抜きや、セブンブリッジみたいなもんだ。

ポーカーのルールくらい知っといても損はないだろ？」
「むー……」
「日曜学校で友だちとやってるぶんには、ただのトランプ遊びさ」
「あ………そうですね。キーア、せっかくだから教えてもらいましょう」
「いいの？」
「キーアには、そういう遊びも経験して欲しいです」
　ちょっとだけ寂しそうに、ティオが微笑む。
　そういえば——とランディは思い出す。とある事件に巻きこまれたせいで、ティオは子ども時代を奪われている。
　友だちとのトランプ遊びなど、経験あるまい。
「ティオすけもやるか？」
「……お気遣い、ありがとうございます。でも、わたしは、夕方までに済ませておきたい用事がありますから」
「そうか」
「んじゃあ、キーアが覚えたら、こんど遊ぼ、ティオ！」
「ふふ……そうですね。負けませんよ？」
「キーアも強くなるよ！」
「ふっふっふっ……お子様たちには悪いが、俺は強いぜ？」
「ランディさん、くれぐれも……」
「わかってる、ミラなんか賭けたりしねえよ」
「キーア、悪い大人に騙されてはいけませんよ？」
「うん！」
　何度も念を押してから、ティオは自分の部屋へと引き上げていく。
　やれやれ、とランディが肩をすくめつつ、トランプを取り出す。
　ポーカーというゲームは——



「そ、そんな……ばか、な……」
「わぁい、また勝った！」
「三連続のフルハウスだと!?　どんだけ強いんだよ!?　こっちに手が入ったときは、あっさり降りられるし……」
「だって、カードが強いときのランディって、ニコニコしてるんだもん」
「いや、してねえって！　それが顔に出るようじゃ、カジノのポーカーで勝てるわけがねえ！」
「そうかな〜？」
「ううぅ……もしかして、癖とかあんのか……？」
　ぺたぺた、と自分の顔をなでるランディ。
「えへへ、ランディ、もういちどやる？」

「やるやる」
　何度やっても、ほとんどキーアの勝ちが続いてしまう。
　ランディが肩を落とす。
「ううぅ……負け……ました……」
「わぁい！」
「はぁ～」
「ランディ、ポーカーって楽しいね！」
「お、おう……ダメだ。どうやら、昨夜で運を使い切ったらしいな。しばらく、カジノに行くのはやめておくか……」
　ため息まじり。
　キーアはトランプを片づけておく。
「また遊ぼうね」
「おし！」
　ランディが立ち上がる。
「どうしたの？　またカジノに行くの？」
「いや、もう行かないっての。ミラを賭けてたわけじゃねえが……こんだけ負けて、なにもナシってんじゃ、男がすたる。ちょっと外へ行こうぜ」
「もう夕方だよ？　ロイドとエリィが買い物から帰ってくると思うけど？」
「そんな遠出も寄り道もしねえさ。ちょっと出店を見るくらいで、夕飯までには帰るって」
「ん～……」
「なにか買ってやるよ、キー坊」
「わぁ……あ……」
　ばんざいしかけて、キーアが止まる。
「ん？　どうした？」
「ランディ、悪い大人？」
「今は、良い大人だ」
「じゃあ、行く！」
「ははは……」
　外に出ると、もうお日様は傾いていて、玄関前に置いておいたパンはきれいになくなっている。
「さて、急ぐか」
「うん！」
　キーアはランディに連れられて、東通りへと向かう。
　露店街には夕飯の買い物をする人が溢れていて、活気がある。
「おっ、風車なんかどうだ？」
「いいの!?」
「もちろんさ。何色にするかなあ？　一色のもあるし、二色を組み合わせたのもあるぞ」
「じゃあ、赤と緑の」

「え～っと……これか。どうして、赤と緑なんだ？」
「えへへっ、ランディとふたりでお出かけして、ランディに買ってもらったから。緑色がキーアで、ランディが赤色でしょ？」
　キーアの言葉に、ランディが固まる。
　ちょっとだけ頬が赤くなって。
「はは……まいったな」
「あれ、おかしい？」
「いいや、そんなことねえさ。ただ、どっかの天然ジゴロみたいだと思ってよ。これで美人に育ったら末恐ろしいぜ」
「ほえ？」
「あ、いや……忘れてくれ。妙なこと言って、ティオすけやお嬢に知られると、あとが面倒だ」
「うん、わかった！　でもキーアは、ランディに買ってもらったこと覚えてるよ」
「おう」
「ロイドとお寝坊したことも、エリィに絵本を読んでもらったことも、ティオとお掃除したことも、ランディとポーカーしたことも……ぜんぶ、覚えてるから」
「……そうだな」
「そんで、キーアは美人になると末恐ろしいの？」
「そいつは本当に忘れてくれください」
　ふたりして笑う。
　支援課ビルに帰る。
　途中で、特売特売と声をあげている入荷したばかりの安くて新鮮なトマトを買って。



　支援課ビルの玄関扉を開けると、ロイドとエリィが出迎えてくれる。
　キーアはロイドに飛びこんでいく。
「ただいま～～～!!」
「おっ、いいタックルだ」
　ロイドが笑う。
　エリィがランディに尋ねる。
「私たちも、今、帰ったところなんだけど、ランディたちも出かけてたの？」
「たんなる散歩さ」
「そう――あら？　それ、もしかしてトマトかしら？」
「なんか安く売ってたもんでな」
「東通りの露店街じゃない？」
「なんで知ってんだ？」
「私たちも、ちょうど買ってきたところなのよ」

「げ……」
「アルモリカ村から、たくさん入荷したみたいね」
「はは……今夜は、トマトがいっぱいだな」
ランディが苦笑して、エリィが頭をかかえる。
いくら安かったとはいえ腐らせるのはもったいない。冷蔵庫なんて飲食店の厨房にしかない。
芋や青物などに比べると、トマトは傷みやすい野菜なのだ。
ロイドが首をひねる。
「うーん、さすがに夕飯が山盛りトマトというのは、厳しいな」
「うへ、かんべんしてくれ……」
四人で思案していると、ティオが自室から降りてくる。用事は終わったらしい。
ふた袋もあるトマトを見て、いぶかしむ。
「今日は、なにを作るんですか？」
「実は、それを悩んでるんだよ」
ロイドの説明に、ますます不思議そうな顔をする。
キーアは、ぽんと手を叩く。
「ミネストローネにしようよ！」
ああ、とエリィだけが表情を明るくする。ロイドとティオとランディは首をかしげて。
「なんだい、それは？」
「聞いたことありません」

「トマトを使った料理なのか？」
エリィが説明を引き受ける。
「え～っと、この絵本に出てきたの。たくさんトマトを使う鍋料理らしいわ」
「そうだったのか……でも、レシピがないと作れないんじゃないか？」
ロイドの疑問に、エリィが弱った顔をする。
ティオが会議スペースに置いてある導力ネットワーク端末へと向かう。
「凝った料理は無理ですが、基本的なレシピであれば、調べられるかもしれません」
「まあ、そんなことができるの!?」
「ネットワークは日々、拡大中です。トランプ遊びのルールだってありますよ」
「ほー」
ランディが感心した声をあげる。
おしゃべりしながらも、ティオの指先は高速でキーを叩く。
「将来的には図書館の本をすべてデータ化するプロジェクトもあります。そうなったら、あの膨大な本の山から、ひとつの言葉を探すことさえ一瞬になるかと」
ロイドたちは驚いて声をあげる。
「すごいんだな、導力ネットワークって」

「本当ね、捜査にも役立ちそうだわ。まぁ、私は本の形も好きだけれど……」
「はい。本は本の形で楽しみたいというひとも多いです……ん？ あ、これではありませんか？」
端末の画面に、本当に簡単な調理手順が表示される。
レシピというよりは、異文化の紹介という趣のデータだが。
エリィが熱心にうなずく。
「なるほど……そういう料理なのね。全部の材料があるわけじゃないけど、代わりは用意できそうだし、これならすぐに作れそうよ」
「わかった、作り方はエリィに任せるよ。手伝うから、なんでも言ってくれ」
「じゃあ、まずはトマトを洗ってもらおうかしら」
「よし」
「キーアも手伝う！」
「もちろん、わたしも……」
「ふふ、ありがと。ほら、ランディもトマトを洗うのよ？ なに雑誌を持ってソファーに腰掛けてるのかしら？」
「うっ……」
ランディが肩をすくめ、ロイドやキーアが笑みをこぼす。
みんなで料理する。
絵本で見たミネストローネ。

赤いスープができあがる。



支援課ビルの玄関が開けられ、タバコをくわえたヒゲの男が入ってくる。
キーアは厨房から顔を出す。
「あっ、かちょー、お帰り！」
「おう……」
セルゲイ課長だ。この特務支援課の責任者で発起人である。
「なんだか、いい匂いがしてるな？」
「うん！」
「ミネストローネです。トマトのスープなんですよ」
エリィが答えると、彼はタバコをくわえたまま唇の端をゆがめる。
「また変わったことをしてるな」
セルゲイ課長は、ロイドたちが普通でないことをするのが、むしろ楽しみのようで、小さな笑みを浮かべる。
ミネストローネをティオが皿によそって、ランディがテーブルに運ぶ。
ロイドはパンを切る。
初めて作る料理でお疲れのエリィは、もうイスに座って待

つ側だ。

　支援課ビルの屋上を寝床にしている猫のコッペと、白狼のツァイトに茹でたお肉をあげてから、キーアは席につく。

　ニンニクとオリーブオイルの香りが、やたらと食欲をかきたててくる。

　目の前に置かれた赤色のスープ。

「おいしそ～」

「みんなの、お口に合うといいけど……」

　エリィが不安げにつぶやく。

　全員が席について、手を合わせる。

　今日の糧（かて）を女神（エイドス）に感謝して。

　ミネストローネをスプーンですくうと、口に運ぶ。

　一瞬、静かに。

　キーアは笑みをはじけさせる。

「おいし～～～!!」

　うん、とティオがうなずく。

「これは、なかなか新鮮な味です。それでいて、懐かしいような食べやすい料理ですね」

「いいんじゃねえか？　鶏肉にも味がしみてるし、こういうのは好みだぜ」

　いつもは料理の感想など口にしないランディが、珍しく饒舌だ。

　ロイドも満足げにうなずく。

「パンにつけても美味いな」

　ほっ、とエリィが安堵の吐息をこぼす。

　セルゲイが、ふぅ～とスープに息をかけてから口に運ぶ。

「日が沈んでから、ちょっと冷えこんだが……こいつは体が温まるな」

　キーアはエリィと顔を見合わせ、

「絵本といっしょだね」

「ふふ、そうね」

　と笑みを交わす。

　濃厚ミネストローネは大成功だ。



　ざあ～っ、と流れるお湯。

　けむる湯気。

　キーアはティオと一緒に湯船（バスタブ）につかる。

　洗い場ではエリィが石けんを泡だててお肌をきれいに磨いている。

　今日は、三人でお風呂だ。

　エリィは手足が長くて、腰が細くて、スタイルがいい。

「ほぅ……」

　隣で、キーアと同じようにエリィを眺めていたティオが、ため息をこぼす。

「きれいです」

「うん」

「しかも、ぐらまーです」

「おっきいね」

「あそこまでのは、大人の女性（ひと）でも、なかなかいません」

「ティオはちっちゃいもんね」

「うっ……あ、いえ……わたしは……こ、これからなので」

　意外と真剣な表情だ。

　頬を赤くしてエリィが咳払いする。

「オホン……な、なんの話をしてるのかしら？」

「……発育（レベルアップ）に関する……女神様の不条理と未来への希望についての考察でしょうか？」

　ティオが視線をそらし、キーアは元気に声をあげる。

「おっぱいの話だよ！」

「はぁ……そんなこと気にしなくていいのよ」

　眉をひそめたエリィが、両手で隠す。

　ティオがブツブツと物質の構成因子のゆらぎについて不平不満をのべる。

　ぽつり、とキーアはつぶやく。

「でも、大きいほうがいいんでしょう？」

　どういうこと!?　とエリィとティオが身を乗り出す。

「なっ……だ、誰が言ってたの!?　まさか、ロイドが!?」

「そうなんですか!?　一大事です」

「ううん。前にランディが言ってたの」

　空気が緩む。

　エリィが、ため息をひとつ。

「やあね……」

「ランディさん……アイスハンマーの刑です」

　拳をにぎったティオが、まったくもって容赦ない。

　エリィがキーアを手招きする。

「キーアちゃん、ばかな人の言うばかなことを覚えてなくていいのよ。髪を洗ってあげるからいらっしゃい」

「はーい!!」

「あっ、キーアの髪は、わたしが……」

「そう？　じゃあ、私はティオちゃんの髪を洗ってあげるわね」

「わ、わたしは……そんな子どもではありません」

「ふふ、いいじゃない」

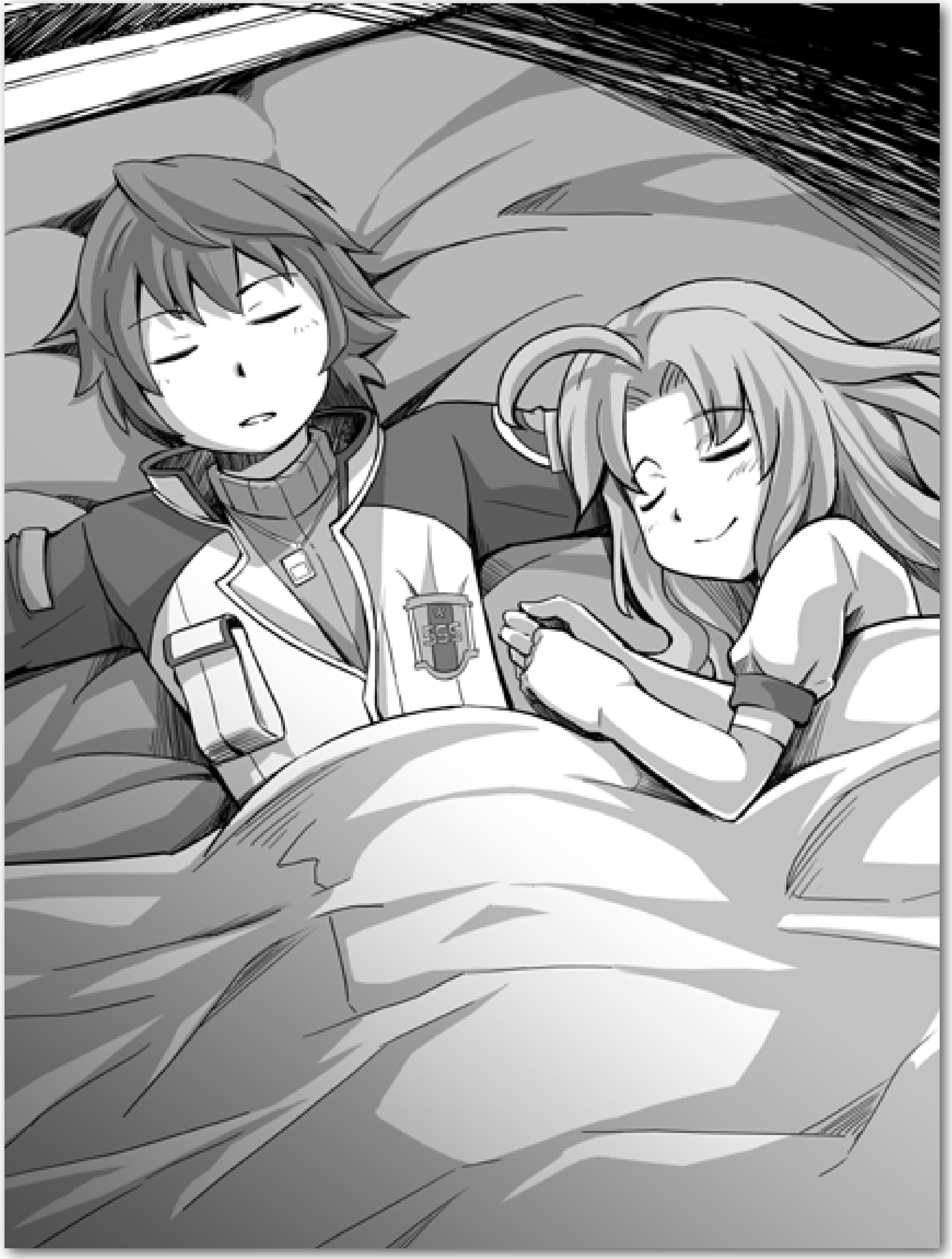
「む……これが、バスト・ヒエラルキー……？」

「そ、そんなんじゃありません！　もう、あんまり言わないでちょうだい。恥ずかしいんだから」

「なるほど……悩みは人それぞれですね」

「えへへっ、ティオ！　髪、洗って！」
「もちろんです」
「ほら、ふたりとも、こっちいらっしゃい」
「……エリィさん、本当にわたしの髪を洗うんですか？」
「たまには、いいでしょ？」
「……ひとに髪を洗ってもらうなんて……ひさしぶりです」
「うふふ……ティオちゃんの髪、すっごいなめらか。絹みたいだわ。うらやましいな」
「エリィさんの髪もきれいですよ？」
「そう？　ありがとう」
「キーアは？　キーアは？」
「きれいですよ。ちょと跳ねてるのが、元気よくてかわいいです」
「そうね。ライムグリーンの色も似合っているわ」
「えへへっ」
　梳くように髪に泡をなじませる。指の平でなでてから、お湯をかけて流していく。
　大切に。
　綺麗になるように。

　お風呂からあがったキーアはロイドの部屋に行く。
　ドアを開けると、ブラウンの髪の青年がベッドのうえに寝転んで、本を読んでいる。
「ロイド、おじゃま？」
「やあ、キーア。そろそろ寝るところだよ」
　そう言いながら、ロイドはエニグマの隣に本を置く。
「いっしょに寝てもいい？」
「今日もかい？　もちろん、いいよ」
「やったぁ！」
　だーっとベッドに走っていき、寝転んでいるロイドに飛びこむ。
　どん！　と受け止められる。
「おっ、いいダイビングだ」
「えへへっ」
　毛布をかけて、お互いの体温であたたまる。
　ロイドが手元のスイッチで明かりを消す。
　窓からの月光が、かすかにふたりの顔を照らして、青い。
　やさしげな顔と間近にある息づかいに、心が落ち着く。
「今日は、楽しかったかい、キーア」



「うんっ。ロイドは?」
「ひさびさに、よく休めたよ。エリィと図書館に寄ったんだけど、居眠りしちゃったみたいだ」
「あはっ」
「でも、探していた本が見つかったし、よかったよ」
「さっき読んでた本?」
「ああ……昔、兄貴が読んでいたんだ」
「そうなんだ」
「さ、もう寝ようか……明日も早い」
「えへへ……寝坊しないようにしないとね」
「はは……今朝は大慌てだったからな」
「おやすみ、ロイド」
「ああ、おやすみ、キーア」
やわらかな声。
静かに目を閉じる。
ゆっくりと、キーアは、眠りに落ちていくのだった。

第6話『キーアのいちにち』了




しかし カンパネルラよ
てめえらしく ねえじゃねえか
いつもの てめえだったら 喜んで教授に 同行してるはずだ
それを しねえってことは 他に面白い ネタがあるんだろ？
とっとと 吐いちまいな
やだなぁ ヴァルター 僕ってそんなに 信用ないかな？


信用してるのさ
てめぇのナンバーと 同じくらいな
No.0―― ふふ…信用ゼロと いうわけね
2人とも キツイなぁ
――ま
見物したいのは 山々だけど
あいにく
急ぎの仕事が あってね


見たまえ
レーヴェ
何とも優美な
存在じゃないか


本当にこんなものを使って「実験」を行うというのか
君の危惧も当然だ
だが《最終型》を仕上げるにはどうしても必要なデータだからね
――おぬしらは…
!
おお…起こしてしまったようだね
20年ぶりのお目覚めかな?
私の名はゲオルグ・ワイスマン
《身喰らう蛇》を管理する《蛇の使徒》を任せられている
……
…去れ…
おぬしらの目は気に入らぬ…
昏い悦びにしか生を見出せぬ…歪んだ魂の匂いを感じるぞ…
…フフ…
お誉めにあずかり光栄だ
しかし残念ながら貴方にも拒む権利はないのだよ
女神の至宝に関わる話だからね
…なに…?

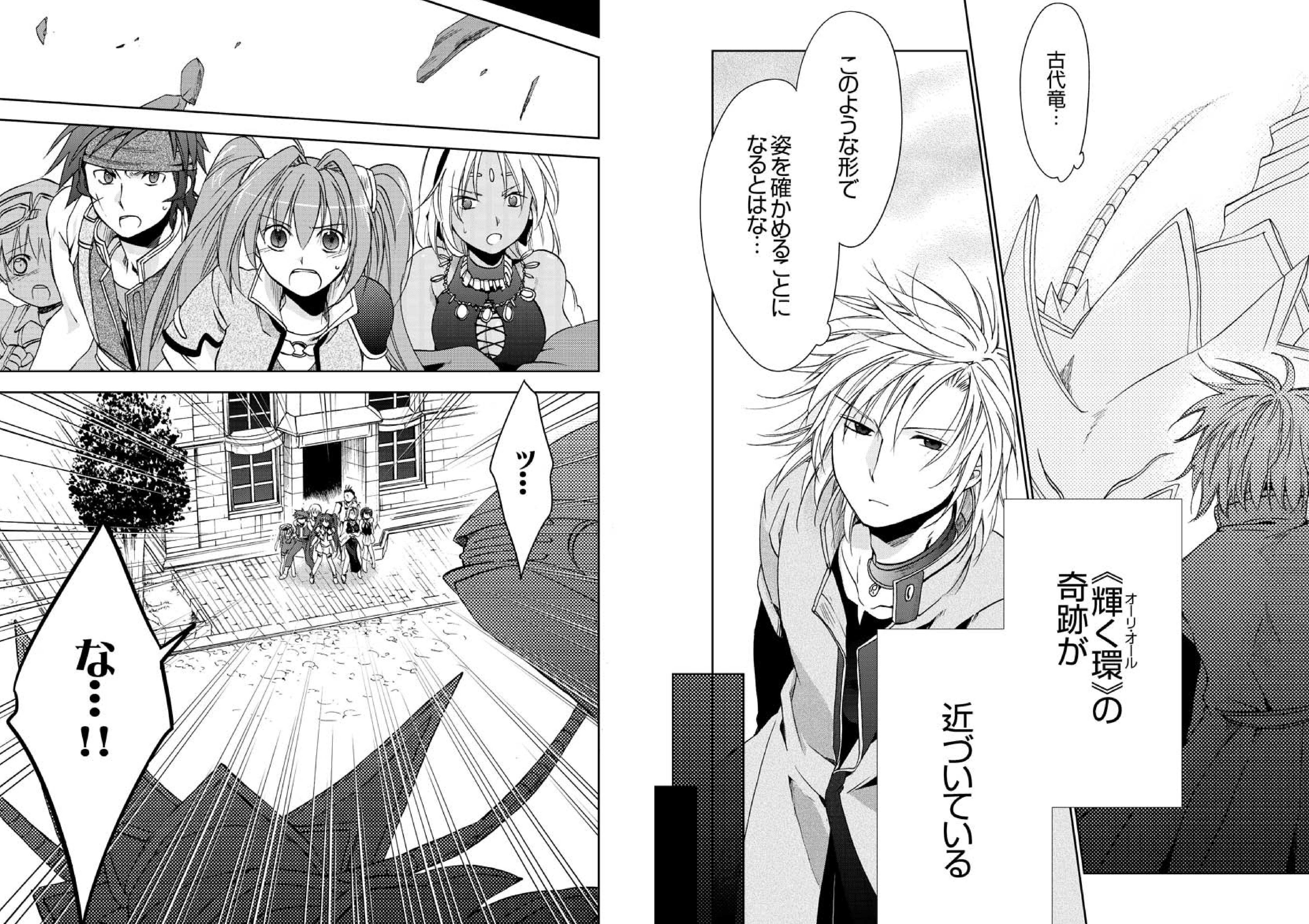


十二〇〇年前の記憶が甦ったかね？
それは…!!
レプリカに過ぎないがよくできているだろう
…おぬしら…まさか《輝く環（オーリ・オール）》を…!!
そのまさかだ



それでは
最後の『実験』を始めよう
……


……フフ
では レーヴェ 後は手はず通りに
……
了解した
これが最後の実験…
この後 全ての実験結果から
本来の機能を備えたゴスペルが完成する…


古代竜…
このような形で姿を確かめることになるとはな…
《輝く環（オーリ・オール）》の奇跡が
近づいている
ッ…
な…!!


何なの…!!?
竜か…!!?
何て大きさ…
まさか…コイツも結社の仕業か!?
……まぁ否定はすまい
!!
特務部隊隊長…
ロランス・ベルガー少尉!!
それはただの偽名だ
執行者 No. II
《剣帝》レオンハルト
以後そう覚えてもらおうか
……!!!



なるほど…
『獅子の果敢』か
すると獅子というのはキミの愛称だったわけだね
あんですって〜!?
…いささか不本意だが仲間内でそう呼ぶ者は多いな
まぁロランスでもレーヴェでも好きに呼ぶがいい
ッ…
舐めやがって…
ヴォオオオオ
！
タッ
……手間をかけさせてくれる



鎮まれ
レグナート
ここではない
お前が暴れるべきは
ここではない
スゥ
あッ
待てやコラ!!


——今回の実験は少しばかり変則的でな
正直お前たちの手に負える事件ではない
王国軍にでも任せて大人しくしておくのだな
……!!
んなこと
きゃあッ
うお
きゃッ!


待てッ
クソがぁぁ——ッ!!!


……!!
わ…
あぁッ…

竜だーーーッ!!
きゃーーっ
うわぁぁ
逃げろ
そうだ
レグナート
無駄な犠牲は
出さなくていい
俺の望みは
復讐じゃない
《輝く環(オーリオール)》に願うのは
ただひとつ


滅びでもない
復讐でもない
人々の心から
失われてしまった
痛みを
弱さを
彼らに
突きつけてやることだ
自然は
空は美しい
ただそこに
住まう
人々の心は
欺瞞に満ちている


その欺瞞を暴くことこそが
俺の願いだ
アァ…
…データをとるには
まだしばらくの時が
必要か
全く…
面倒な仕事を
押しつけてくれる
何が
面倒
だと…!?

FB ファルコムBOOKS

ファルコムブックス 好評発売中!!



特務支援課メンバーの『零』までの軌跡を描く

英雄伝説 零の軌跡　四つの運命

著：田沢大典　イラスト：松竜

2010年、2011年に発売された日本ファルコムの大ヒットRPG『英雄伝説 零の軌跡』『英雄伝説 碧の軌跡』の主人公である【特務支援課】メンバー・ロイド、エリィ、ティオ、ランディの、ゲームでは語られることのなかった過去エピソードや、名シーンの裏側などが描かれた日本ファルコム公認のオフィシャル小説です。

判型：B6 正寸　**総ページ数：**320P
価格：1,155 円(税込)
発行：フィールドワイ　**発売：**メディアパル
ISBN：978-489610-215-4

剣帝・レーヴェの視点から『空』を描いたコミックス

空の軌跡外伝 レーヴェ物語

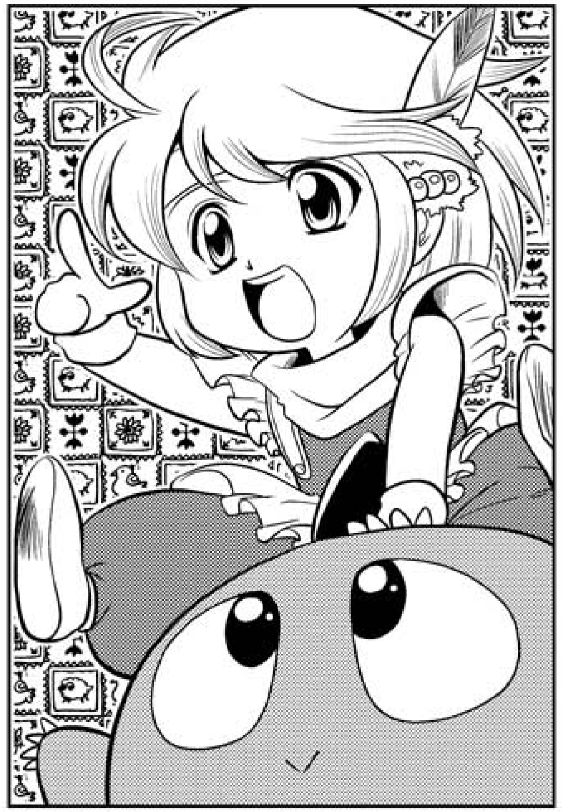
脚本：田沢大典　作画：楽時たらひ

累計販売本数100万本を越える日本ファルコムの『軌跡』シリーズ。その人気キャラクターである《剣帝》レオンハルトが、いかにして結社に組みすることとなり、そしてその後の数奇な運命に巻き込まれていくかを描く、『空の軌跡』のアウターストーリー。



判型：A5 正寸　**総ページ数：**160P
価格：893 円(税込)
発行：フィールドワイ　**発売：**メディアパル
ISBN：978-489610-224-6





みんな集まれ！ファルコム学園

新久保だいすけ

開かずの扉



変態現わる



ドラスレファミリー



妻と娘



素朴な疑問



パスワード



見覚え



魔物と家族



ポチの正体



ロイアス



母と息子



イリアのイは陰獣のイ



由来



心当たり



兄妹の絆



英雄伝説　空の軌跡
～リベール王国スナップショット～

著：はせがわみやび

第3回『うたかたの夢を見ないで』（後編）

10

潮の香りがドロシーの鼻をくすぐっている。

海港都市ルーアンの南にある倉庫街だ。酒場を出て少し南へ歩いたあたり。

黒々としたシルエットとなって聳え立つ波止場の倉庫の前で、ドロシーは考えていた。

まずは——きちんと確かめることからだ。ドロシーのポーチを拾ってくれたカイヤが、ユミナの言う《レイヴン》のカイヤなのかどうか。

「おうい、ドロシー！」

声に振り返る。

「ナイアル先輩！」

「東の端に使われてない空き倉庫があるそうだ。連中はそこでたむろっているってよ」

「空き倉庫、ですか」

「ああ。最近じゃ水上輸送は下火なんだ。飛行船での貿易が主流になってきてるんだよ。ルーアンも観光都市に変わりつつあるみてーだし」

ナイアルが、調べてきたルーアン事情を話してくれる。

ぶつぶつ言いながらも必要なことをやってくれる人なのだ、ナイアル・バーンズという人物は。

「けっこうやんちゃな連中が揃ってるらしい。おまえはホテルに戻ってろ……って、聞くような性格じゃなかったな」

やれやれと肩をすくめられた。

海へと流れ込む川の河口に突き出るようにしてその倉庫はあった。

あたりに幾つも立ち並ぶ倉庫と形は変わりばえしないが、最近使われていないのだろう証に、荷を運ぶ台車や空き箱、荷を縛るロープのような実作業につき物の道具が近くに見当たらない。ただ、建物だけがそびえていた。

閉ざされた扉の向こうに人の気配がある。

ナイアルがゆっくりと扉を押し開ける。錆びついた鉄のこすれる音があがった。

導力は通っているようで、薄暗い明かりがぼんやりと倉庫の中を照らしている。三々五々とばらばらに散っていた少年たちの何人かが振り返って、ドロシーたちのほうへと顔を向けた。

「なんだあ、ねぇちゃん、あんちゃん。ここはおまえたちみたいな、小奇麗なやつらがくるとこじゃねえぞ。あっち行きな、あっち！」

「っと、待てよ、ディン。そっちの眼鏡のねえちゃん、どっかで見たことねぇか？」

「んあ？　なんだってぇ？」

ディン、と呼ばれた若い男がドロシーのほうへと近寄ってきて、しげしげと顔を見つめてくる。ドロシーのほうも思い出した。

「あ、やっぱり橋のところで会った、おっかない先輩不良さんですよぅ！」

「おっかねぇだと？」

「はい。主に顔が」

「てめっ、言ってくれるじゃねえか！」

「おまえはひと言多いんだよ！　って、ああ、聞いたの俺か！」

「こいつら……おもしろい漫才やってくれるぜ」

「そうだなあ、ディン。ちっとばかりおしおきが必要みてぇだなあ」

じりっとディンとロッコがにじり寄ってくる。周りの連中も、おもしろい余興が始まったとばかりにはやし立てるだけで止める気はないようだ。

ふたりの迫力に思わず一歩下がってしまったドロシーだったが、入れ替わるように、すっとナイアルが前に出た。

「悪かったな。機嫌を直してくれ。別に喧嘩をしにきたわけじゃねーんだ」

「ちっ！　ちんちくりんのくせに男連れかよっ！」

灰色の髪をしたロッコのほうが切れた。かなりの短気だ。

「お、おい待て。俺とこいつは別にそんなのじゃ……」

「ひとりものの無念を思いしれえええ！」

——それは言いがかりって言うんじゃ。

などというドロシーの心の中のツッコミは聞こえるはずもなく、ロッコが、まくった袖から伸びる太い腕をナイアルにぶつけてきた。

ナイアルは一介の新聞記者だ。それなりに危ない現場での取材もこなしているとはいえ、遊撃士のように荒事に慣れているわけでもなければ、戦いの訓練を積んだわけでもない。

それでも避ければ避けられたはずだ。だが、彼の後ろにはドロシーがいた。

「センパイッ！」

ドロシーは思わず叫んでいた。

まともに叩きつけられた拳を、ナイアルは顔の前で組み合わせた両腕で辛うじて防いでみせた。そうしなければドロシーが殴られていたからだ。衝撃は殺し切れず、彼の唇からくぐもった声が漏れる。

「へ……。そういう女の前で格好つけるのが一番気に入らねえんだよっ！」

拳を引いたロッコが距離を取って足で拍子を取る。拳を左右交互に振ってから、「いくぜ！」と叫んでふたたびナイアルに向かってきた。

このままだと今度こそやられてしまう――そうドロシーが考え、反射的に構えたオーバルカメラのフラッシュを焚こうとしたときだ。

ドロシーの脇を風が吹き抜けた。

11.

誰かが走りぬけたのだと気づいたのは、その影が、まばたきするほどの時間でロッコとディンのふたりに躍りかかってからだった。

「うお!?」

「なっ！」

短い言葉を発して、ロッコとディンの身体が宙に浮き、硬い床へと叩きつけられていた。

「ロッコ、ディン！　うわぁぁ、だいじょうぶかぁ！」

ふたりの後ろにいた一番性格の軽そうな男が慌てている。

「おい。レイス……」

「あ、あ……。兄貴ぃ」

「ロッコ、それにディン……。おまえら、まだ、こんなことやってんのか？　言っといたはずだよな、今度こんな真似してるところを見つけたら容赦しねえって」

そう言い放ったのは、大きな剣を背中に背負った赤毛の青年だった。細身に見える身体をしているが、軽鎧から覗く腕も首も目の前の若者たちよりもひと回り太い。鍛えあげられた身体だ。

赤毛の青年の一喝で、《レイヴン》の若者たちはたちどころに大人しくなった。

相当、恐れられている人物のよう。

《レイヴン》の男たちは、一転して愛想笑いを浮かべ、ドロシーとナイアルに対して紅茶まで出してくる始末だ。さすがにお菓子はつかなかったけれど。

「すまなかったな。こいつらの不始末は俺が後でよ～く言ってきかせておくからよ」

赤毛の青年の言葉に、後ろにいた強面の不良たちが震える。ほのかな導力灯の明かりの下で青ざめた顔が陰気に並んでいた。

「で、新聞記者とカメラマンが、《レイヴン》に何の用がある?」

「あー。俺たちはカイヤって名前のヤツに、ちょっとばかり聞きたいことがあるだけなんだけどな」

「そうですそうです」

「カイヤ……？　そんな名前のヤツいたか?」

赤毛の彼の問いかけに、ロッコが「あ、そいつなら最近入ったヤツです」と答えて、背後の男たちの中に呼びかけた。応えて、ひとりの少年が前に出てくる。

「あ、やっぱり」

ユミナから聞いていたとおりの若者だった。

ドロシーのポーチを拾ってくれた人物でもある。

「あんたがカイヤか」

とナイアル。

「ああ」

「あの……ユミナさん、ご存じですよね?」

ドロシーがその名を出したとき、カイヤの顔が苦いものを噛んだときの表情へと変わった。

「あんたたちユミナの……」

「あの……ごめんなさい。事情を聞いてしまったんです。それで、あの……何があったんですか?」

「別に、なんにも……」

「なんにも、って……ユミナさんが心配していたですよ。漁にも出なくなっちゃったって……」

そう言ったドロシーの言葉に、だがカイヤは押し黙ったまますかに首を振った。

これ以上、話すことはない。そんな感じに見えた。

「ま、おまえさんの事情は置いといて、だ」

ナイアルがそう言ってから、公爵の釣りの手助けをしてくれないかと切り出したが、カイヤの答えは芳しくないものだった。

「おれはもう漁師はやめたから……」

ぼそっとつぶやくように言ってから、「もう、いいっすか」とたむろっている仲間たちの元へと戻った。

それ以上はどうすることもできず、ドロシーたちは引き上げるしかなく。

——いったい、何があったというんでしょう？

ホテルへと戻る道すがら、ドロシーは暗い瞳をしたカイヤについて考えを巡らせてみたのだけれど、何も思いつかなかった。どこかであんな瞳を見た気がするのだけど……。あまりにも自分はあの若者について知らなすぎると思った。

ホテルのフロントへと辿りついたところで、ナイアルが「仕事に差し支えるからさっさと寝ろ」と言ってから街へと引き返した。何かの取材の続きだろうと思ったドロシーだったが、ひとつだけ気づいたことがある。

——先輩、ホテルまで送ってくれたんですね。

まだ宵の口だ。でも、そのまま波止場で別れて取材に繰り出さずに、わざわざ街の反対側にあるホテルまで送り届けてくれたのだ。

——ふふっ。たまに先輩らしいですよねー。

ベッドに入って毛布にくるまる。落ち込んでいた気分が少しだけ浮上してきた。

いい夢が見れるだろう。明日はもうすこし元気になって、きっと、いい考えも浮かぶに違いない……。

12

寝つきのいいドロシーがベッドで寝息を立て始めた頃。

ナイアルは、波止場に一軒だけ存在する酒場《アクアロッサ》で漁師たちの集うテーブルについていた。

もちろん、酒を呑みたかったからではない。

「じゃあ、カイヤってのはあんたたちから見ても相当に釣りの腕があるわけか」

ナイアルの問いかけに、ああ、とガラガラ声の男が答える。腕の太さがナイアルの倍はある大柄な男だった。

「この港じゃ一番だな。おやっさんの域にはまだまだだけどよ」

「ほう。……その、おやっさんてのは？」

ナイアルの問いに、ガラガラ声の隣にいた皺だらけの老人が答えた。

「カイ坊の親父じゃ」

「ああ、そういや代々漁師だとか言ってたな」

「惜しい男を亡くしたもんじゃ」

そう言って、小さなグラスに半分ほど残っていた液体を呑み干した。赤ら顔をなお赤くさせて、重いため息を吐く。

遠い海まで出て戻る途中だったという、月の無い暗い夜、急変した天候、時化に会って、とぼそぼそとつけ加える。

船は転覆し、船乗りたちは誰ひとり帰らなかった。流れ着いたのはバラバラになった船の欠片だけ。カイヤが十四のときだったという。

泣いて泣いて沈み込むだけの母を支えたのはカイヤだった。

「それがどうして漁に出てこなくなったんだ？」

そう尋ねると、テーブルの男たちは互いに顔を見合わせた。途端に口が重くなる海の男たちの中、最初にナイアルが奢ったガラガラ声の男が応えた。

「やっぱ……あれが原因じゃねえかな」

「あれ？」

「そのちっと前からおかしくなってたんだよ。なんてったかな……」

「『見えない』だろ？」

「ああ、それそれ」

「見えない？」

「ん。あのな、カイヤのヤツは針に食いつく魚が見えるんだと。どんなに水が濁っていようと、何セルジュ深い水底を泳いでいようとさ」

「で、それが見えなくなった、と？」

どこかで聞いたような話だな、とナイアルは思った。

「ああ。ま、それでも俺たちよりか、よっぽどたくさん釣り上げるんだけどよ。アイツには我慢できなかったらしい」

いらいらが募っていたところでヘマをした。

『ばっかやろう！　漁を舐めんな！』

漁師たちをまとめる親方にそう一喝され、あくる日から浜に出てこなくなった。気づけば《レイヴン》とかいう不良たちのグループにいつの間にか混じって、日がな一日だらだらしている始末だ。

「なるほどな」

なんとなくナイアルにも事情が飲み込めてきた。

——これだから天才ってヤツは……。

「ユミナちゃんもかわいそうにな」

ガラガラ声の男がそうつけ加えて、周りの男たちも同時に頷いた。

「ユミナってのは……」

ドロシーが出会ったという少女の名だ。そこまでは覚えていた

「可愛い娘なんだぜえ」

「カイヤにはもったいねえ」

「ちっこい身体で子犬みてえに、とととっと岸壁を走ってくる姿を見ると、もう、撫でまわしたくなるほどだよなっ」

そう言った男を見て、ナイアルは思わず心の中でツッコんだ。そりゃ、あんたから見たら誰だってちっこい身体だろうよ！　自分よりも頭ふたつ分は確実に大きい男だったのだ。

胸板だって倍は厚い。その巨漢が身体をくねらせて「可愛い」を連発してみろって、ほら鳥肌が立ったじゃねえか。

「それが毎日カイヤの野郎に弁当を届けるためだってのが気に入らねえがよ!」

大声で言って、ちげえねえ、と男たちが同意する。

そうして話は元に戻る。カイヤが船に乗らなくなったので、波止場の男たちも彼女の姿を見られなくなった。ずんと重い雰囲気に戻る。気分が上がったり下がったり忙しい。まあ、単純なのだ。よくいえば素朴。

「健気な嬢ちゃんだで。自分だって辛かろうにのう」

赤ら顔の老人が言った。

ユミナの父もまたカイヤの父と同じ船に乗っていたのだ。

ジェニス王立学園に通うという夢も砕かれて、それでも今は自らの手でお弁当屋を開くのだと頑張っている。

「お、俺は、店が開かれたら一番に行くからって言ってあるんだぜ!」

うっかり言った男がいたものだから、いや一番は俺だとそれぞれが言い始め、そこから先は言い合いになって、まともなことが聞ける状態ではなくなった。

——まあ、収穫はあったか。

こっそり席を立って勘定を済ませると、ナイアルはホテルに戻った。

隣のベッドで幸せそうな顔をして寝息を立てているカメラマンを見つめながら、ネクタイを緩める。靴を脱ぐのも面倒でそのまま自分のベッドに転がった。

さて——どうしたもんか。

考えているうちに意識が闇の中に落っこちた。夢も見なかった。

13・

正午を知らせる鐘が鳴って、ナイアルは目を覚ました。首を曲げると、もうドロシーのベッドは空になっていた。

枕から頭を持ち上げようとして、思わず頭を抱え込む。

ずきんときた。

「つう……。こいつはヤバイ」

枕元の水差しからコップ一杯の水を喉へと流し込む。海の男たちはどいつもこいつも新聞記者とは身体の作りが違うらしい。あのままつき合ってたら、今日は仕事にならなかったところ。

「あのトンチキ娘……どこへ行きやがったんだ?」

テーブルには書き置きらしきものは見当たらない。

着替えてフロントに上がる。

そこでナイアルは思いがけない人物を見た。

偉そうにふんぞり返った髭の男と、ひょろりとしていて腰の低い年配の男のコンビだ。

デュナン・フォン・アウスレーゼ公爵殿とその執事だった。

フロント係を困らせつつ最上階の部屋の鍵を受け取っている。

——さすがにあいつら仕事が早いな。

どうやら、エステルとヨシュアの遊撃士コンビは、公爵殿を首尾よくエア=レッテンから引き剥がし、ルーアンの街に連れ帰ることに成功したらしい。

やって、みるか、と腹をくくる。ついでにネクタイも締め直した。

「公爵殿とお見受けしますが……デュナン・フォン・アウスレーゼ様でしょうか」

名前ではなくて、爵位を先に出して言うところがコツだ。

地位を殊更に強調するものはその地位に自信がない。自分に合った身分に居るのならば自分を誇ればいいのであって地位を言い立てる必要はないはずだからだ。

つまり——自分に自信がないから虎の威を借りている。

だからこそ、見た目でさも公爵然としていますね、などとおだてられると……。

「ああ、うむ。わかるかね」

相好を崩して口許をゆるめた。

「それはもう。見るからに堂々たる押し出しで」

「うわっはっは。そうだろう。なあ、フィリップ、わかるやつにはわかるのだ!」

ほら、ガードがゆるんだ。こういうところは——まだ善人の印だ。本当の悪党はこの程度では警戒を解かない。

「で、お前は誰だ?」

「おれ……私はナイアル・バーンズと申します。リベール通信社の記者をしております」

「なんだ、記者風情か」

——ふぜい、だと?

「あー。……そうですね」

いかんいかん、思わずむかついて殴りつけるところだった。記者なんて敬意を払われるほうが珍しいのだが、この公爵の言いようときたら……。

「お忙しいところを恐縮ですが——」

と、まずは正攻法で取材を申し込んでみる。

「ダメだダメだ。私は暇ではないのだぞ。これでも次の国王となる身だからな!」

「いや暇だろ——」

じゃなきゃ、お忍び旅行なんてできねえよ、とつい言ってしまいそうになってまたも口を閉じる。

「ん? 何か言ったか?」

「いえ。……時に、公爵様は釣りにはご興味がおありですか？」
「釣り、とな？」
「ええ……。確か、このホテル《ブランシュ》には釣りの道具一式と船が用意されていると聞いたような。ですよね？」
　と最後の部分はフロントのほうへと振り返って問いかける。
　ホテルのほうも心得たもので、にこやかな笑みを顔に張りつけたまま、
「はい。申し出て頂ければご用意させていただきます。ボートもありますし、ちょっとした遊覧もできますよ」
　と、答えてきた。ホテルとしても公爵様の機嫌を損ねたくないのだろう。竿や餌はどこからか調達してくれるに違いない。さて――どうでる？　と、ナイアルはデュナン公爵の返事を待った。
「ふむ……ところで何が釣れるのだ？」
　――そうきやがったか。関心だけは見せてくれたようだが……。
　問われてもナイアルもルーアンに詳しいわけではない。そんなことわかるわけがない。だが、このときはフロントが味方してくれた。
「メッシーナなども採れますが、大物を狙うならクロディーンでしょうか。噂では百リジュを越えるヌシがいるとか、いないとか」
「ヌシ……だと？」
「はい。三十年釣れたことがないとか。釣り上げればかなりの釣果です。きっと、リベール中の話題になるでしょうね」
　こっそりと打ち明けるようにして言うものだから、公爵の目つきが変わった。
　そこから先は順調で、どうやら公爵の関心を安全なところに向けておけるなら歓迎らしい執事の口添えもあって、とんとん拍子で公爵様の釣りの予定が決まった。
　これで、公爵のほうはどうにかなった。
　あとはどうやってカイヤを引っ張りだすかだが……。

14.

「あ、ナイアル先輩」
　部屋の扉を開けたら、ドロシーが戻っていた。ベッドの上に座り込み――。
「おまっ、何食ってやがる！」
「お腹空いたんですよぅ。お昼にはまだちょっとありますし。このチーズ美味しいですねー」
「俺の買い置きをてめえ」
　――とっておきだったのに！
　まあ、いい。こいつは今まで何をしていやがったんだ？
　ナイアルの問いかけに対するドロシーの答えは想像を超えていた。
「カイヤ君に公爵の釣りの指導を頼んできました」
　驚いたのって。
「どうやったんだ！」
「そりゃもう、家にお伺いして誠心誠意を尽くしたんですよー」
「という建前は置いておいてだな」
「あれあれ。やはり信じてくれませんかぁ」
「欠片もな！」
「そこまで！」
　わざわざ愕然とした顔を作るんじゃない、とナイアルは心の中でツッコむ。
「で、何をした？」
「前にも言いましたように、カイヤ君とはこの街に来た日に出会ってるんですよね」
　と言いながら、オーバルカメラで撮ったいつかの写真を見せてくる。橋を南へと渡っていくカイヤの背中を映したやつだ。顔は振り返っているからわかるものの全体的に画像は小さくて荒い。
「このポーチを拾ってくれたんですけど」
　腰に引っ掛けていたポーチを掲げる。ポムがでかでかとプリントされたキラキラポーチは凶悪なまでに可愛らしかった。
「写真を見せつつ、実は拾ってくれたときの写真も撮ってたんですよ、と。それはもう、ポムちゃんの愛らしいポーチを抱えたカイヤ君のお姿なわけですよ」
「お、おう」
「引き受けてくれないなら、代わりにその写真を『《レイヴン》メンバーの意外な少女シュミ』というタイトルで記事にしていいですか？　と笑顔でお願いしたら、あっさり」
「脅迫じゃねえか！」
　確かにそんな写真がリベール通信に載ろうものなら、街ですごみを効かせることなんてできそうもない。それにしたって不良グループのメンバー相手に危ない橋を渡るヤツだと思ったが、ドロシーはさらっと「悪いひとではないと思いましたので」と言った。
　ナイアルとしては感心するやら呆れるやら。
「そういや、考えてたんだが……あのカイヤってのが漁に出なくなった原因だけどな」
「ボースでのわたしと同じ、ですよね」
「気づいたか」
　ルーアンに来る前のボースの街で、ドロシーは一時的に写

真が撮れなくなった。
　風景の表情が見えると言うオーバルカメラの天才ドロシーがだ。
「今となっては何がきっかけだったかわからないんですけど。何を見ても、どのコもどんな気分なのかわかんなくなっちゃって。笑って欲しいのか、お澄ましして欲しいのか、それすら、わかんなかったんですよぅ」
　ドロシーが言った。
　そもそも、風景の感情なんてものは、普通の人間には読めないものだと思うのだが。
「先輩はそーゆーとき、どーしてるんですかぁ」
「俺か？」
　記者で言えば、記事が書けなくなったとき、ということだろうか。
　ナイアルにとって、その答えはとてもシンプルなものになる。そもそも記事が最初から思い通りに書けた試しなんてない。できないことが当たり前なので、できなく「なった」という経験が、残念ながら今のところないのだ。
「それでも締切は来るんでな。やらないわけにいかないしなー」
「まあでも……そーゆーことかなって、わたしも、ちょっぴり……」
　このまま思ったんですよね、とつけ加える。
　だから、とにかくもういちど漁師の仕事と向き合わせることだと思ったわけだ。
　天才ゆえのスランプに万能の対処法なんてあるものかわからないが、それでもこれは何かせずにいられないナイアルたちの性分なのだった。
「まあ、何かしたっていう自己満足が欲しいだけかもしれないですけど」
　いきなり自信なさげになって俯くものだから、ナイアルは困った。
　だから、ため息なんて吐くなっての。
　自分にはこーゆーときのうまい対処法も心得がない。
「それがわかってるんだったら、いいんじゃねーの」
　言いながら、二、三度、ドロシーの頭を軽くぽんぽんと叩いた。えへへ、とドロシーが眼鏡の奥の目を猫のように細めながら、少しだけ顔を明るくする。
　もうすこし何か褒めてやれそうなことは……。
「そういや……」
　ひとつだけあった。
「よくポーチを落として慌ててるときに写真を撮ってたな。たいした——」
「あ、さすがにそれは無理でしたよー」

——なんだって？
「つまり、そこは嘘です」
　ドロシーはにっこり笑って言うのだった。
　こ、このトンチキ娘ときたらまったく……たいしたやつだ！

15.

　朝、というにもまだ早い時刻。
「ふぁぅふふふぅふぁ……むにゃ」
　欠伸が漏れる。ドロシーは、眠い目をこすりながらナイアルの服の背中をつまんだまま歩いていた。ホテルの廊下には明かりがかすかにしか灯っていないので、そうしないと転んでしまうのだ。
　ホテル《ブランシュ》の裏手、西に面した扉を開ける。
　潮風が顔に当たり、かすかに目が覚めた。扉の向こうに広がっていたのは黒々とした夜の海だ。小さな桟橋が揺れる海面へと突き出している。
　ボートが一艘留まっていた。
　すでにカイヤが乗り込んでいた。仏頂面を隠そうともせずに、それでも黙々と船を動かす準備をしている。導力機関の調子を確かめ、船に乗せた釣り具の具合を確かめ。
「置いてあった船よりでかくねえか？」
　ナイアルのつぶやきを聞きつけ、桟橋に立ってカイヤの働きぶりを見ていた船の管理人らしき老人が言う。
「人数が多いですからな。ひとまわり大きい船を借りて参りました」
「多いんですか？」
　ドロシーが尋ねると、「五人ときいております。いつもの船ではそんなに乗れません」と返してくる。
　そんなにいたっけとドロシーは指折り数えてみた。
　まず、自分とナイアルだ。それからカイヤ。ここまでで三人。これに今回の一応は表向きの主役である公爵。
　これで四人。あれ、足りない？　それとも、このおじいさんも乗るのだろうか。
「ああ、眠い眠い。それにまだ暗いではないか。こんな中で釣りなどできるものか。魚も見えんぞ」
「閣下。そうは申されましても」
　公爵と執事がやってきた。そうか。執事さんがいた。なるほど、これで五人。
「ふああ。でも確かに眠いですよぅ」
「我慢しろって。まずめに合わせたんだろ」
　ナイアルの言葉を耳にした船の上のカイヤが、かすかに意外そうな顔をして、ナイアルのほうをちらりと見たことに気

づいた。
「まずめ？　それ、なんですか先輩」
「あー。だから、日の出や日の入りの前後の時間をそう言うらしい。朝の早い時間を朝まずめ、夕方を夕まずめ。釣りに良い時間ってされてるんだよ」
「へー」
　ナイアルの言葉は公爵にも聞こえたようで——聞こえるように言ったのだろうけど——公爵が気まずそうに咳払いをした
「し、知っておったわい。そうそう朝まずめしだな」
「まずめ、でございます」
「まずいご飯は美味しくないですよねー」
「おまえはしゃべるな」
　ナイアルに怒られた。
　五人でボートに乗り込み、桟橋を離れる。船の導力機関を動かすのはカイヤの役目だ。
　白い波を後ろに追いやりつつ船はゆっくりと動き出した。
「どっちに行くんだ」
「……川のほうに戻る」
　そう言いながら舳を返した。海を背中にして進み始める。
　行く手の東の空の下の方がうっすらと白くなってきたかなという頃だった。

　このまま進むと……。
「橋で進めねえんじゃ……。ああ、橋が上がるか」
《ラングランド大橋》は跳ね橋で、日に三回ほど真ん中で割れて跳ね上がるのだ。その時だけは船で川を遡れるようになる。朝の、まだ人が行き来しない時間に最初の一回目がくるはず。
「橋は越えない。狙うのはクロディーンだと聞いている」
「ヌシだ」
　デュナン公爵が言った。文字通り雑魚には用がないという意味だ。
「……橋桁のあたりに隠れたポイントがある。クロディーンなら、それなりの大きさを釣れるはずだ」
　そうぽつりと言った。
　暗に、そうそう大物なんて釣れないぞ、というニュアンスが込められている。
　しかし、公爵様にはその手の機微を読み取る感性はなかったようで、
「それなりではない。いちばん大きいヤツを釣るのだ！」
　カイヤは黙って船を操った。

16.

《ラングランド大橋》が見えてきた。
　徐々に白くなってきた東の空を背景にして黒々と横たわっている。
　こうして川面から見上げると、ひときわ橋の巨大さが際立つ。長さが百アージュ以上ということは、ドロシーたちの乗るボートのおよそ二十倍ほどか。それなりに大きいボートなのに、橋の大きさに比べれば木の葉みたいなものだ。当然のことながら、大きな橋を支える部分もそれなりに巨大で……。
　その橋桁の近くで船が止まる。
「なるほどな。確かにこのあたりのポイントじゃ、陸からは狙えないな」
　ナイアルがぽつりとつぶやく。ドロシーもぐるっとあたりを見回して納得した。橋桁は川に食い込むように建てられているから陸側からでは回り込めない。
　しかも橋桁でぶつかった川の流れが渦を巻いていた。これでは落ちたら危ないから近寄らせてもくれないだろう。
　カイヤが不思議なことを始めた。
　船に乗せてあった釣竿を順に並べだしたのだ。ちゃんと餌もつけてから、橋桁の周りのあちこちに針を放り込み、船の側面に並べていた支えに置いてゆく。
　——あれあれ？　釣りをするのは髭の公爵さんだけだと思ったのですが。
　それにしては、竿の数が多い。五竿、いや六竿か。船に乗っている人数以上をずらっと並べてしまった。
「なんだこれは……？」
「……公爵様はどうぞいちばん左のを使ってください」
「釣るのはわたしだぞ！」
「はい」
　横柄な態度にも、カイヤはよく辛抱していた。相手が公爵だからか、それともドロシーの脅しが効いているのか。あるいは……。
「でも、なんでこんないっぱい竿があるんですか？」
　ついドロシーは聞いてしまった。
　カイヤの顔が面倒くさそうな表情になる——あら、まずかったでしょうか。
　代わりに答えてくれたのはナイアルだった。
「竿の種類が多いのは……折れたときのためと、魚の重さによって耐えられる竿は変わるからだな」
「いちばんでかいのが釣れれば充分だ」
「か、閣下！」
　はあ、とため息をついたのはナイアルだった。
「でも、折れたときのための替えは必要ですよ、公爵殿」
「む。う、うむ」

「餌は……クロディーンを釣るならシュラブとかクァサゴじゃなかったかな……。色々替えて試してみるつもりじゃ……」

「コエビとイソメもよくかかる」

　ぼそっとカイヤがつけ足した。

「水の温度や流れの速さによって、魚のいる深さも変わる。どの竿のどの餌で、どの程度の深さに錘を沈めれば良いかは毎回ちがう。今日一日で釣るつもりなら、ひとつの竿で色々試している暇はない」

「おいおい。だからといって――」

　ナイアルが理解したと頷きつつも絶句していた。

「――おまえひとりで、六竿も見張るつもりか！」

「いちおう、ひとりひと竿ずつ見てもらう。俺が引けと言ったら、竿を上げろ。後はなんとかする。いちばん右のふたつは俺が見る」

　言われたことがドロシーの眠い頭に染み込むまで少しかかった。

「えっ……わ、わたしもやるんですかあ！」

「騒ぐな。魚が逃げる」

　ぎろっと睨まれた。ひぇえ。今までいちばん、こ、怖い、かも。

「わたしが釣るんだ！　わたしだ！　いいか、ヌシを釣り上げて国中の評判を得るのは、このデュナン・フォン・アウスレーゼなのだ！」

「か、閣下！」

　はあ、と今度はカイヤがため息だ。

「もちろん……です。釣りのもっとも大変なところは釣り上げるところ。魚の当たり――喰いついたところを引くことなんて、それに比べれば前座のようなもの。釣り上げるのは公爵様です」

「そ、そうですとも、閣下！」

「む……そうなのか」

　ナイアルが顔の前で手を左右に振りながらドロシーのほうに目配せをした。口が「嘘、嘘」と言っている。なるほど嘘なのか。きっと当たりに合わせて竿を引くのが肝心に違いない。

　こうして船の側面に並んで、全員で釣り竿を見張る作業が始まった。

　ドロシーもカメラの用意をしつつ、自分の前の竿から垂れた浮きを見守る。その一方で右隣りのカイヤもこっそりと見ていたのだが。

　すぐに、ドロシーは釣りに対しての認識を改めることになった。

17

　釣りというのはのんびり屋に向いているのだとドロシーは思っていた。

　一日中釣り糸を垂れたまま、ぼうっと水面を睨む作業が続くとばかり。

　だが――どうやらそれは間違いだったらしい。

　カイヤはひと時もじっとしていることがなかった。

口を開いたりこそしないが、彼は六つの竿を絶えず見張っていた。しかもドロシーが思っていた以上に頻繁に、餌を替えたり、浮きの位置を調整して針を沈める位置を変えていた。六竿ぜんぶに対してだ。気長どころか、せっかちに見える。

　むしろ公爵のほうがだらしなかった。竿を掴んだまま、すぐにぼうっとしてしまって、カイヤの「引け！」の声にも、しばしば遅れる始末だった。

　合図があったときは、たいていは魚がかかっていたというのに。

　カイヤは魚が実際にかかったかどうかわかるらしく、浮きが沈んだと思っても声をかけなかったときは竿を上げるだけ無駄に終わった。

　時間がゆっくりと流れてゆく。

　一時間が経った。

　東の空の底のほうが徐々に赤みを帯びてきた。

　闇が西へと追いやられてゆく。もう天頂付近まで白くなってきた。星がひとつまたひとつと消えてゆく。

　カイヤは、小さな魚はそのまま逃がしてしまったし、それなりに大きくともクロディーンでなければ放してしまった。

　八十リジュを越える大きさのクロディーンが何匹か釣れた。

　それで満足してくれれば良かったのだが、公爵殿は気に入らないようで、文句ばかりが増えていった。だが、素人のドロシーにさえわかる。公爵ほどのヘボ釣り師は他にいない。間違いない。

　そのくせ、ポイントが悪い、餌が悪い、竿が悪いと文句ばかり。しまいに腹が減ったと大声でわめいた。

「フィリップ！　何か食べるものはないのか！」

「閣下……その……あいにく何も」

　ドロシーたちだって何も食べてないのだ。まさか、こんなにねばることになるとは思わなかったし。

「魚ならあるけどな」

　釣り上げたクロディーンのほうを見ながらナイアルが皮肉で言ったけれど、公爵はそんなものが食えるかと一蹴してしまった。

　――ええっ？　食べないのにこれ以上釣る気なんですか

……。

カイヤのこめかみが徐々に引きつってくるのがわかって、ドロシーはハラハラしてしまう。

それでもカイヤは耐えた。

単調な繰り返しに思える作業を延々と休まずに続ける。川を睨みつけ、流れの下を泳ぐ魚の動きをなんとかしてつかもうとしていた。

汗がカイヤの額に滲んでいる。竿を上げては餌を替え、針を投げ入れる作業を、ひとりで、しかも六竿分もやっているのだ。疲労も溜まるだろう。川面に投げるまなざしは揺れることなく真剣で、ドロシーはその横顔を写真に残せないのが残念だった。

この暗さではフラッシュが必要だ。でも、閃光を焚いたら魚がきっと逃げてしまう。

二時間を超えた。そろそろ三時間になろうかというところ。暁の最初の光が東の彼方に走った。

「まだか。まだかまだかまだか！　もう夜が明けるぞ！」

「辛抱ですよ、公爵様」

「何を言う。もう三時間も経つのだぞ！」

「どんな漁師だって、一晩で大物が釣れるとは限りません。そのときできることをやって、あとは幸運を待つしか……」

言いかけて、カイヤが口をつぐむ。

「ふん！　わしは一介の漁師ではない。釣りの天才なのだ！」

「……」

それきりカイヤは黙ってしまった。相変わらず川を睨み続けていたが、どうしたことか、少し物思いに耽っているようにも見えた。その理由がなんとなくドロシーにもわかるような……。

「ドロシー！」

ナイアルが叫んだ。

はっと我に返る。ほぼ同時に、カイヤが「引け！」と叫び、ドロシーは反射的に自分の前の竿を手にしていた。

浮きが一瞬で水面下に沈み、竿が見たこともないほど大きくしなった。

――こ、これは！

心臓がどきりと激しく鳴った。

「貸せ！」

横からカイヤがドロシーの竿に手を伸ばして掴んだ。

間一髪。

次の瞬間、竿がほとんど倒れるくらいまで引かれて、ドロシーはもう少しで船の外へと放り出されそうになる。慌てて胴を掴んでくれたのはナイアルだった。それでも竿をカイヤが掴んでくれていなかったら、先輩ごと川に落ちていただろう。

「くそっ！　こいつは……」

うめくようにカイヤが言う。

「セ、センパイ、くるし。あの……放してくださ……」

「うわっと！　わりぃ！」

ドロシーの胴に巻きついていたナイアルの腕が離れる。船の縁に掴まりながら、ようやく息をつき、自分の竿にかかった獲物を見ることができた。

しなる竿の先にピンと張った糸。その糸を、ちぎらんばかりに引いている魚の影が水の下にかすかに見える。

「大きい……」

「ありゃ百リジュはあるんじゃねえか」

漆黒の身体はクロディーンだ。だが、それまでに釣り上げたものよりも、ひとまわり、いやふたまわりは大きい。確かに百リジュはありそうだ。

そして引く力も段違いだった。

「くっ……。この、じゃじゃ馬め……」

竿の先が水面ぎりぎりまで下がっている。竿が折れないのが不思議なほど。

「やべえぞ、おい」

ナイアルがつぶやき、公爵の執事が「ああ！　船の下に！」と声を漏らした。

魚影がゆっくりと消えてゆく。船の下に潜り込もうとしているのだ。

このままだと竿が、

折れる！

18・

「船を回すぞ！」

ナイアルが導力機関に飛びつきスイッチを入れた。かすかな震動とともに船を動かす導力が復活する。

「たの……む」

カイヤは声を出す余裕もないようだ。

ナイアルが船をほんのわずかずつ動かし軸を回転させてゆく。魚を船の真下から追い出しにかかった。その間もカイヤは竿を持つ手を緩めない。決して無理には引っ張ろうとせず、だが、魚に絶えず負荷をかけて弱らせていく。

船縁を掴むドロシーの手にもじわっと汗が滲む。心臓がどきどきと激しく鳴っていた。

――がんばれがんばれ！

あれだけ騒がしかった公爵も傍らの執事も息を呑んだままじっと見つめている。

じりじりと時が進む。魚との我慢比べだ。焦ったほうが負ける。だがカイヤは辛抱強かった。この勝負に絶対勝つつも

りなのだ。失った自信を取り戻すために。

「ああ。橋が！」

執事の声にドロシーは顔を上げる。

見れば、ナイアルによってじりじりと動かされていた船が、もう少しで橋にぶつかりそうな位置にまで来ていた。身体を伏せれば、マストのない船だ、ぶつかりはしないだろうが――。

「くそっ……逃がすか……」

「カイヤさん、橋が！」

ちらりとカイヤも視線を走らせる。さすがに顔が歪んだ。

――もうすこし……。もうすこしなのに！

そのとき船に乗っていた全員が思っていたに違いない。ああここまでか、と。

もう船が――ぶつかる。

そのとき、時計台の鐘がひとつだけ鳴った。

それが合図だったかのように、大橋が中央から割れる。

「橋が上がる……」

南と北に設置された巻き上げ機が巨大な円筒を回し始め、絡みついた鋼の鎖を巻きとってゆく。

立ち上がっていたらぶつかるはずだった橋が空へと開いてゆく。

頭上を覆っていた黒い影に亀裂が走り、白い色に染まっていた空へと向かって広がっていった。自分たちを閉じ込めていた箱の蓋が開いていくかのようだった。

「さあ……。そろそろ観念しろ……よ」

カイヤの声にドロシーは我に返った。水面に視線を戻す。

魚の影が濃い。水面まで上がってきたのだ。

鼻先が一瞬だけ水面に出た。丸い波紋が川面に幾重にもなって広がる。やった！　とドロシーが思った瞬間に、そいつは最後の抵抗をした。きびすを返し、ぐっと竿を引いて水底へ潜った！　はっとなって、一瞬、ドロシーは息が止まった。逃げられる！

だが、その動きをどうやらカイヤは読んでいたようだ。

「させる……か！」

ゆっくりとカイヤは竿を上げてゆく。

魚の影がふたたび見えてきて、水面に近づくにつれて流線型の体つきがはっきりとしてくる。またもや鼻先が水の上に出た。そこでようやく魚は力尽きた。

釣り上げる最後の瞬間だけ、カイヤは竿を公爵に渡した。

「ゆっくり……ゆっくり上げてください。急にやると糸が切れます」

網を手に持ちながらカイヤが指示する。

「わ、わかった」

「そうです、ゆっくり……」

水面上に魚の全身が出た。そこで一度だけ、びくっと魚が身体を曲げた。

「わ、わ、わわわ！」

「閣下！」

慌てて公爵の身体を抑えたのは執事のフィリップだ。そのおかげで公爵は転びはしなかったが、釣り上げた魚はぶらんこのように揺れて――。

音高く公爵の顔面にぶつかってきた。

「ふぎゃあ！」

びたん、とはっきり音がした。ドロシーは思わず顔をしかめてしまった。

――うわあ、痛いですよぅ……。

公爵は目を回してひっくり返った。

気づけば、船は橋を越えて川を遡っていた。朝日が昇っていて、通り過ぎた橋を照らしている。

ドロシーは半ば無意識のうちにカメラを構え、シャッターを切っていた。フレームを覗いたとき、天に刺すように跳ねている橋の先ほどに、キラリと小さく何かが光ったのが見えた。あれは……。

南北に開き切った橋を、もういちどカメラで覗く。

まるで祝福の万歳をしているみたいだった。

――うれしそうです！

釣り上げたクロディーンは一〇三リジュ。

上がり切った橋を背景にして、魚を抱えた公爵の記念撮影をする。

何もしなかった公爵は、それでも満面の笑みを浮かべてクロディーンを抱えていた。

魚がぶつかった顔面は真っ赤に腫れたままだったけれど。

――これ、たぶん、写真は没ですね……。

執事のフィリップだけが、「お見事です、閣下！」を連発していた。

それでも目的を達したので良しとしようとドロシーは思う。なにしろ、いっぺんにふたつも問題が解決したのだ。さて、ナイアル先輩に言っておかなくては。

エピローグ

公爵と執事をホテルに届けてから、ドロシーの提案で、もう一度だけ船で橋に戻った。

ファインダー越しに覗いたときに見えた小さな光。

割れた橋の先に引っかかっていたそれは、ドロシーの予想した通り、ユミナが落としたペンダントだった。

「これを落としてしまって、ユミナさんはとっても悲しんでました」
　そう伝えながら、降りてきた橋からナイアルに取ってもらったペンダントを渡す。
「ユミナが……」
「もう一度、あなたの手から渡してあげてくださいね」
　カイヤが小さく頷いた。
　ナイアル先輩が咳払いをひとつしてからカイヤに尋ねる。
「で、だ。どうよ。漁師はやめちまうのか？」
　ゆっくりとカイヤは首を振った。
「いえ……。もう一度やり直します」
　ドロシーも、ナイアルもほっと安堵の息をついた。
「まあ……そう言うだろうと思ったぜ。あれだけ嫌がってたわりに、本気で釣ろうとしてたからな。……何があった？『見える』ようになったのか？」
　解決したとはいえドロシーも気になっていたことではあった。
「いえ、まだ『見え』ませんけど……」
　カイヤは船に積み込んでいた荷物の山から、布にくるまれた小さな包みをもってきた。ほどくと、お弁当箱が入っていた。
「今朝……ユミナが届けてくれたんです」
「えー！　朝って、だって……、あんなに早かったのに!?」
　驚いてしまう。ドロシーがまぶたをこすっていた頃より遥かに早く起きただけでなく、お弁当まで作ったっていうのだろうか。
「俺……。今までずっと魚が『見える』のが当たり前で。それができなくなることがあるなんて思ったことがなくて……」
　ぽつりぽつりとカイヤが語る。
「なんかショックで。このままだと、親父とかじいちゃんとかを追い越すなんて絶対無理だなって……。駄目だ勝てないとか、そんなことばかり考えてて。でも、あいつ——俺が魚を獲りに出るって、そう聞いただけで、こんなの作ってくれて」
「すごく喜んでいたでしょう？」
　カイヤが頷いた。
「だから俺、今できることだけでもやろうって……」
　よかった、とドロシーは心から思った。
「あー。待てよ」
　何かに気づいたようにナイアルが首を傾げる。
「ってことは、公爵殿が腹が減ったとか言ってたときも、いちおう船の中に食べられるものはあったわけだよな？」
　——そういえばそうだ。

「あいつにだけは食わせたくなかったんです」
　カイヤがぶっきらぼうに言った。
　頬が少しだけ赤くなっていたのは、朝焼けのせいだけではないだろう。
　お弁当箱を開くと、メインはライスボールだった。六個も入っている。釣りをしながらでも片手で食べられるようにだという。中身が山菜なのは海の幸ばかりを食べさせられて飽きていたカイヤの好物だからだそうだ。
　ナイアルもドロシーもひとつずつわけてもらった。
　船を元の桟橋へと返すと、カイヤと別れた。
　カイヤはこれからまっすぐにペンダントを渡しに行くという。手を振って去ってゆく姿を見ながら、ドロシーは小さくつぶやく。
「結局、わたしたちが何かする前に解決しちゃってたんですねー」
「いんや。おまえだって役に立ったさ」
　珍しくナイアル先輩がそんなことを言った。
「そーでしょうか」
「証拠がある。だからこそ、おまえはちゃんと報酬をもらったろ？」
　ライスボールを握る手つきをしながら言った。
　——ああ！
「確かに……」
　次期国王候補の公爵さえありつけなかったシロモノなのだし。
　それで、ドロシーの心も晴れやかになった。すっかり日が昇ったルーアンの朝の空気と同じくらいに。
　青い空を背景にした白い街並みがきらきらと輝いて見える。

※

　ドロシーはナイアルの書いた記事を抱えて王都に戻った。
　しばらくして、お忍びで旅行中の公爵が巨大な魚を釣り上げたとの記事が、リベール通信のささやかな埋め草として掲載された。
　扱いの小ささに公爵はあまり喜ばなかったらしいし、結局ドロシーの写した写真は没になったけれど。
　その写真——大物の魚と、釣り上げた公爵の後ろに立つ若き天才漁師の姿を映した一葉を、ドロシーはルーアンの街のひとりの少女の元へと送った。
　喜んでくれるだろう人のところへ。
　彼女は、その一枚から背景の人物だけを切り抜いて、結婚するまでずっと枕元に飾っていたそうである……。

人生半キャラずらし



jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります！

ふぁるこむボスざんまい & SORCERIAN SUPER ARRANGE VERSION Ⅲ



岡島俊治（Okaji）

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤禎央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc

皆様こんにちは、jdkBANDドラマーのオカジです。

ここ最近の話ですが、「ふぁるこむボスざんまい」というアルバムの制作に携りました。

アレンジャーは、数々のファルゲーのアレンジを手がける神藤由東大氏と、盟友カミチャこと上倉紀行氏。そして僕もなんとアレンジャーとしても関わらせて頂いてしまったのです。本当に各自趣味全開のスーパーアレンジバージョン！ 選曲もかなり猛烈で、Ysにソーサリアン、ブランディッシュにガーブから零&碧の軌跡と、これ一枚聴くだけで、かなりファルコムに詳しくなれるのではないか!? という激アツなアルバムになっております。

昔からファルコムと言えば豪華なアレンジアルバムを沢山出している事で有名なので、その名作たちに匹敵する、もしくは凌駕するようなアルバムを作らねば！ とアレンジャー陣一同気合入りまくり。個人的には、特に前々から挑戦してみたかった戦国ソーサリアンのアレンジがやれて本当にうれしい。僕には邦楽業界の若手演奏家の知り合いが多いので、そんな彼らを巻き込んで戦国ソーサリアンのアレンジがやれたらおもしろいのに……と、実はjdkBANDに入る前から企んでいました。念願叶ったこのアレンジ……早く皆様にお届けしたいな〜！

さて、先ほどから「戦国ソーサリアン」というタイトルを連呼し続けているわけですが、軌跡シリーズなどからファルコムに入った方には「?」な状態かと思います。リメイクもされていないし、今遊ぼうと思ってもなかなか敷居が高いのも事実です。



そんな皆様に、まずは「戦国ソーサリアン」というゲームをご紹介致しましょう。

このゲームは、かの有名な超名作ARPG「ソーサリアン」の追加シナリオとして1988年に発売されました。舞台は戦国時代、動乱の日本。ペンタウァの王から、日増しに力を増大させつつある大名に憑いた「魔」を討てとの命をうけ、ソーサリアンが旅立つというもの。ゲームとしてはやっぱり難しいです……というか、そもそも追加シナリオなので、当然キャラクターが育った事を前提に制作されているわけで、いきなり難易度MAXな状態。そんなわけでして、こんな解説文書いてる身でありながら、実はワタクシ、戦国ソーサリアンをクリアできておりません……というか、ソーサリアンそのものが当時小学生の僕には難易度高すぎました……。いつかプレイしたいと思って88版を揃えては居たんだけど、棚に並べて悦に浸ったところで終わっております。



じゃあ何故そんなお前がソーサリアンを語るのだ！ と思われるでしょう。……ごもっともです。ですがね、当時ファルコムは（今でもだけど）サントラやアレンジCDなどでもとても有名で、どこのCD屋に行っても、必ず何枚かアルバムが見つけられる程だったわけですよ。当時ファルコムであればなんでもかんでも興味津々だった僕としては、この戦国ソーサリアンも、ゲームというよりも音楽で楽しんでいたというわけです。

戦国ソーサリアンのすべての楽曲を楽しめる唯一のアルバム「SORCERIAN SUPER ARRANGE VERSION Ⅲ」、こちらもゲームはプレイした事なかったのに、カセットテープで所有しておりました。ファルコムが和物の作品の音楽を手掛けるとこうなるのか！ という感じの名曲だらけ。FM音源って哀愁をおびた和のメロディーにも合うんです。今夏発売になる「ボスざんまい」と併せて楽しんでみてはいかがでしょうか？

ファルコム楽曲4,000曲をiTunesで
世界50ヶ国に配信中。
（ファルコム楽曲はすべて高音質化、DRMフリーが適用されたiTunes Plusでの配信となります）

iTunes配信中のコラム関連アルバム情報
[SORCERIAN SUPER ARRANGE VERSION Ⅲ]
価格：1,500円
収録曲数：33曲

≪Falcom jdkバンドライブ特設サイトURL≫
http://www.falcom.co.jp/jdk/index.html

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

コミックマーケット82出展情報!!



今年も出します真夏の日本ファルコム!

８月10日から開催される夏の祭典、コミックマーケット82。今年も日本ファルコムはたくさんのグッズを用意して出展予定！　今回の目玉商品はオリジナル音楽ＣＤ『ふぁるこむボスざんまい』だ。ファルコムゲームのボス曲をjdkバンドがアレンジしたノンストップボスラッシュ、これを聴けばあの熱いバトルシーンが甦ってくること間違いなし!?会場では特別価格で先行販売。2,500円（税込）。

『ふぁるこむボスざんまい』収録曲

1.最強の敵＜イース -フェルガナの誓い-（イースIII）＞
2.邪魔をするな！＜英雄伝説朱紅い雫＞
3.風神雷神＜戦国ソーサリアン＞
4.ふるわれる奇蹟＜英雄伝説碧の軌跡＞
5.ガドビスタル＜ブランディッシュ＞
6.Inevitable Struggle＜英雄伝説零の軌跡＞　and more...

新作グッズ盛りだくさん！ファルコム福袋

欲ばりセットをゲットせよ!

美麗なイラストを使用したグッズがたっぷり入ったファルコム福袋がふたたび登場！　『ファルコム福袋SC』となった今回は数を大目にご用意。専用の豪華ショッパーにも注目だ。他にもペンダントやピンバッジなど、会場限定仕様になったアクセサリーも忘れずゲットしよう。詳細は特設ＨＰまで。（http://www.falcom.co.jp/c82/index.html）

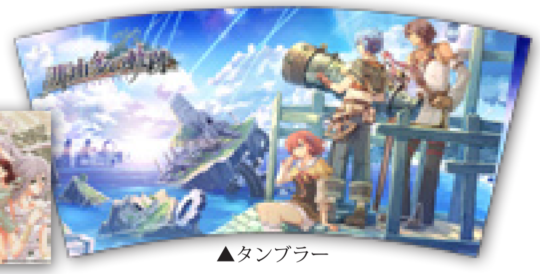



▲B2タペストリー



▲スポーツタオル


▲▶卓上カレンダー


▲タンブラー

英雄伝説 空の軌跡（４）

工房都市ツァイスの争乱!?

ＷＥＢコミック「ゲッキン」で大好評連載中のコミカライズ第４巻。謎の黒い導力器を調査するためツァイスの街にやってきたエステルとヨシュア。導力器の権威・ラッセル博士とその孫のティータと共に導力器に秘められた能力を探ろうとするのだが……!?　ヨシュアに対するエステルの揺れる気持ちが垣間見えるシーンなど、見どころも満載。8月10日、バンダイビジュアルより発売。630円（税込）。



英雄伝説 零の軌跡（１）金の太陽、銀の月

大人気RPGが待望のノベライズ!!

2010年に発売されて以来、多くのファンを獲得してきた名作ＲＰＧがついにノベライズで登場。金と人が集まる"魔都"クロスベルを舞台に、それぞれの過去や想いを胸に秘めた若者で結成された特務支援課の物語を描く。彼らは腐敗した街の"壁"を乗り越えることができるのか。表紙はゲームイラストも担当したエナミカツミの描きおろし。8月17日、富士見書房より発売。672円（税込）。



英雄伝説 零の軌跡 Evolution PV無料配信

進化した「零」を体験しよう!

10月18日に発売される『英雄伝説 零の軌跡 Evolution』の魅力がたっぷりつまったプロモーションムービーがPlayStation®Storeで配信される。２月の発表以来、第２弾となる今回のナレーションは主人公・ロイド役の柿原徹也さんが担当。ロイドとはひと味違った雰囲気で案内する『零えぼ』の世界は必見だ。PlayStation®Storeで７月31日より配信開始予定。





「ティオの"ファルコムラジオ" めんどくさいです… でもがんばります」DJCD『めんどくさいラジオCD』そのいち

最強コンビのラジオがついにCD化!



2011年10月から配信開始されたＷＥＢラジオ『ティオの"ファルコムラジオ"めんどくさいです…でもがんばります』のＤＪＣＤが発売。収録されるのは、新規録りおろしのラジオ１本と第１回から第６回のゲストパート総集編の豪華２枚組みだ。録りおろしラジオにはアガット・クロスナー役の近藤孝行さんがゲストとして登場する。3,675円（税込）。



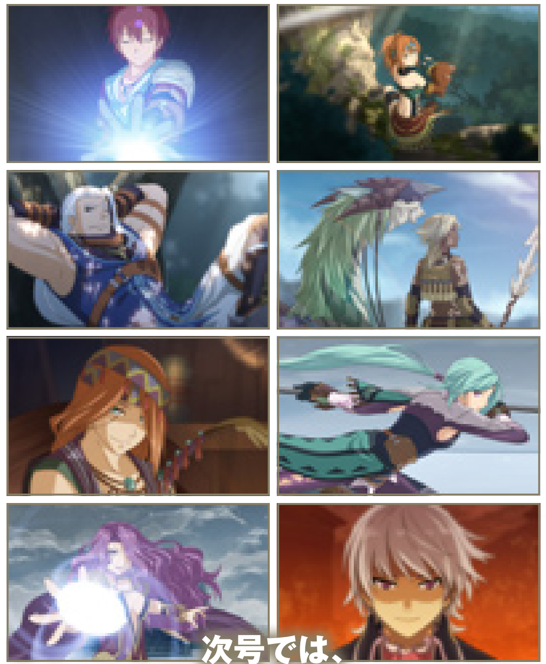
25周年メモリアルもスタート！『イース　セルセタの樹海』の最新情報が到着！

イース25周年記念日となる6月21日以来、続々と新情報が公開されている『イースセルセタの樹海』。今回はその中から、オープニングムービーと、注目の新キャラクターたちをピックアップ！

OPENING MOVIE

待望のオープニング映像が公開！

7月6日についにオープニング映像が公開された。ここではその中から気になるシーンを一挙掲載！　アドルはセルセタの樹海で何を見るのか……。期待は高まるばかりだ。



次号では、「イース生誕25周年記念パック」に同梱されるドラマCDに参加したキャスト陣のコメントを掲載予定! 乞うご期待!!

■製品情報

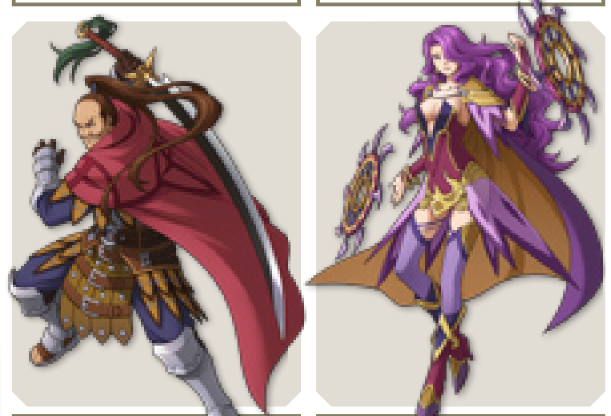
■タイトル　：イース セルセタの樹海
■英題　：Ys -Foliage Ocean in CELCETA-
■発売日　：2012年9月27日(木)発売予定
■ジャンル　：アクションRPG
■対応機種　：PS Vita（プレイステーション・ヴィータ）専用
■プレイ人数：1人
■税込価格　：通常版7,140円(税込)
イース生誕25周年記念パック8,925円(税込)
■CEROレーティング：B

NEW CHARACTERS



▲カンリリカ
（CV：小倉 唯）
「叡智の街」と呼ばれるハイランドで暮らす少女。リーザを慕っており、彼女の助けになりたいと思っている。子どもっぽい見た目ながら、時には理路整然とした意見を言うことも。

▲レムノス
（CV：野島健児）
樹上の集落・コモドの住人で、カーナの双子の弟。工芸品作りや竪琴を奏でることを好む、一見軽薄な青年。詩作りが転じて、セルセタの伝承に詳しく独自に研究をしている。



▲レオ
（CV：阪 脩）
セルセタ地方に進駐しているロムン帝国の軍団長。<< 雷鳴のレオ >> とも呼ばれる高名な軍人のようだが……？

▲バミー
（CV：日野由利加）
アドルが冒険の中で出会う、妖艶な女魔道師。その目的は謎に包まれている。

※画面は開発中のものです。



2011年10月から好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■配信日　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■メインパーソナリティ　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■公式ホームページ　http://www.falcom-radio.com/

第38回-第39回　佐藤利奈（『零の軌跡 Evolution』リーシャ・マオ役）

38回、39回のゲストは、久しぶりの登場となる、リーシャ・マオ役の佐藤利奈さん。前回同様、パーソナリティーの水橋かおりさんとの「番長」合戦が繰り広げられたほか、佐藤さんがカレーが苦手という意外な事実が判明した。また、「出発！特務しれん課」では、2週にわたって支援課見習いであるガチくんとしおりんのオリジナルキャラ作りが行われ、完成したイラスト＆ぬいぐるみにパーソナリティーのふたりが悲鳴を上げる一幕も!?

▶第38回-第39回の舞台裏◀

第39回で披露された「HELLしおりん」＆「ガティオ」人形。このふたつの人形は、今も収録スタジオに鎮座しているのだ。その姿はまるで、まもなく1周年を迎えるファルコムラジオを見守る守護神のよう（!?）。いつの日か、スタジオの写真もお届けしたいと思います！

第40回-第41回　金子英彦（『零の軌跡 Evolution』ヨアヒム・ギュンター役）

40回、41回のゲストは、ヨアヒム・ギュンター役の金子英彦さんが2回目の登場。前回は、金子さんが『空の軌跡』で演じられたクルツ・ナルダンの話題が少なかったが、今回は「ティオのつぶやき」コーナーを筆頭に、彼の代名詞（!?）であるボートネタが満載の収録となった。「出発！特務しれん課」コーナーでは、２週にわたって早口言葉対決が行われ、パーソナリティーの小寺可南子さんの滑舌の良さに一同が驚くシーンも。

▶第40回-第41回の舞台裏◀

第41回の公開が、最新作『那由多の軌跡』の発売翌日ということで、オープニングはティオではなく、『那由多』の主人公のナユタとして登場した水橋さん。今後は『零の軌跡』だけではなく、『那由多の軌跡』のキャスト陣もゲストとして登場予定なので、こうご期待！



今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！

Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。
FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々のイラストとコメントを毎月お届けします！



霞

壮大なストーリーと自分に語りかけてくるようなキャラのセリフに、いつの間にかゲームの世界に入り込んでしまうのだと思います。SCラストでは何ともいえない幸せを感じて本当に感動しました。

『英雄伝説 空の軌跡SC』(2006)

衝撃のストーリー展開を見せた『FC』の続編となる「軌跡シリーズ」２作目。正遊撃士となったエステルは、秘密結社《身喰らう蛇》の陰謀を阻止し、ヨシュアと共に家に帰るため新たな旅に出る。

FALCOM MAGAZINE SPECIALプレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



❶『那由多の軌跡』ナユタ役 水橋かおりさん サイン色紙

日本ファルコム最新作『那由多の軌跡』の主人公・ナユタ役を熱演した声優・水橋かおりさんの直筆サイン色紙。ここでしか手に入らないファン必見のアイテムだ！



❷『みんな集まれ！ファルコム学園』

『Falcom magazine』で絶賛連載中、ファルコムキャラが大集合した新久保だいすけ先生のコミックがついに単行本に！描きおろしでは『那由多の軌跡』キャラも登場！



❸ファルコムマガジン特別出張版 Vol.3

日本ファルコムの新作情報をたっぷり紹介した冊子版マガジン第３弾。『英雄伝説 零の軌跡Evolution』の新規クエストをフィーチャーした特別コミックも掲載！

プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

- ●下記のメールアドレスをご記入ください。
- ●お名前（ペンネーム可）をご記入ください。
- ●右記の記事一覧から、今月号で一番面白かった・つまらなかった記事をご記入ください。
- ●ご意見・ご感想などをご自由にご記入ください。
- ●希望するプレゼントの番号をご記入ください。
- ●「vol.18プレゼント係」とご記入ください。

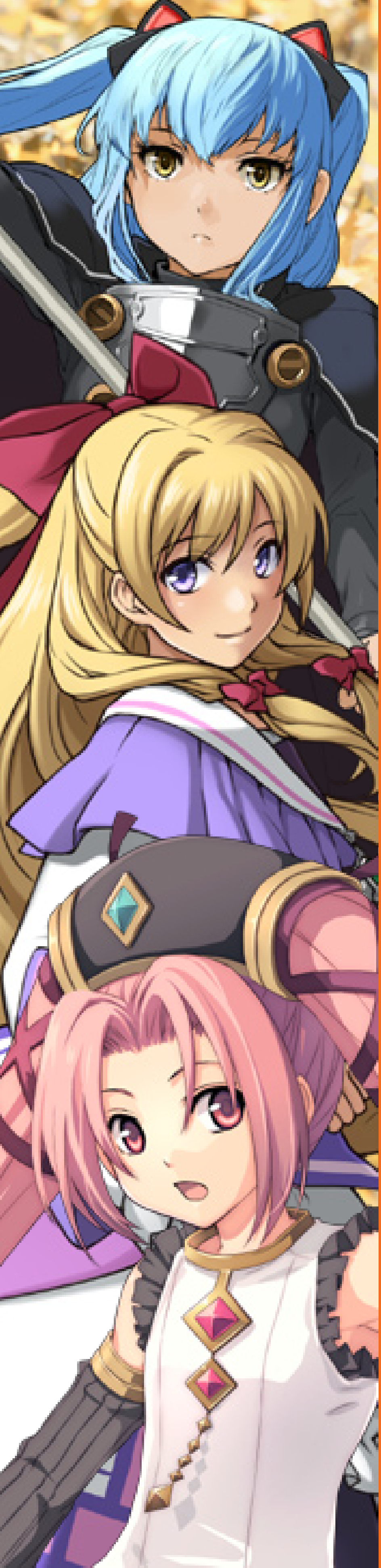
宛先：
件名：vol.18プレゼント係
○○○○○○○○○○
◆
面白い：
つまらない：
◆
○○○○○○○○○○
◆
1

【記事一覧】

1：『空の軌跡外伝 レーヴェ物語』
2：『みんな集まれ！ファルコム学園』
3：英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット
4：英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～
5：jdkバンドドラマー・オカジの人生半キャラずらし
6：ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏
7：FalcomFanArt Collection
8：ファルコムニュース

宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp 応募締め切り **8月24日**

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.18

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社